
D I V A

u n i c o r n

PDF小説ネット
Byウメ研究所
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

D I V A

【Nコード】

N 4 1 3 8 A

【作者名】

u n i c o r n

【あらすじ】

復讐を誓い生きてきた歌姫。そんなアリスが奇妙な運命により、元殺し屋の佐久間と出会う。佐久間に少しずつ惹かれていくアリス。仲間と出会い、行動する中でアリスは何を得るのだろうか。

第1話：良い度胸だ

「侵入者だ！」

鳴り響くサイレンに小さく舌打ちをしたアリスは、目の前に連なる巨体を見上げ笑った。

脳みそまで筋肉でできていそうな男たちは、アリスに向かいゆっくりと銃を向けた。銃口から放たれた幾つもの凶器はアリスの胸を目掛け、唸りを上げる。

アリスは一切動じず、床を力一杯に踏み込み大きく宙を舞う。人間とは思えないほどの超人的な跳躍力。その姿はまるで天使のように軽やかだった。

「なっ」

「悪いけど、寝てもらおうよ」

呆気にとられた筋肉質の男たちの背後に立ったアリスは、懐から小指程度の大きさの球体を取り出すと、地面に勢いよく投げつけた。開け放たれた球体から睡眠ガスが一気に溢れ出る。男たちは次々と眠りに落ちていった。

まもなくアリスは、お目当ての研究室辿り着いた。どうやら追っ手は撒いたようだ。逸る気持ちを抑え、嚴重に閉ざされた研究室の扉を開ける。

そこには、二重にもなるガラスの層によって、嚴重に守られたICチップが一つ。

アリスはチップを傷つけないように気をつけながらガラスを特殊な道具で円形に切り取った。なんとか傷を付けずに取り出せそうだ。ICチップは月明かりを浴びてキラキラと光を反射させている。アリスはそれに手を伸ばし手のひらに収めると、小さく笑った。

「お痛はいけねえなあ」

その瞬間。背中に感じた気配にアリスは身を強張らせた。

「！」

背後から聞こえた低い声。振りかえった先には、銃口を向ける一人の髭面の男。こんなにも近くにいたのに、男の気配すら分らなかった。アリスは動揺を隠せなかった。

「さあ、そいつを渡してもらおうか」

男はアリスの手に収まるICチップをちらりと見ると、妖しく笑ってみせた。

「嫌だと言ったら？」

ダークスーツを身にまとったその男は、帽子を深々とかぶっていて顔の半分しか見ることができない。30代ぐらいだろうか。整った鼻筋に面長の輪郭、漆黒の髪の色。なんて月明かりの似合う男だ。妙に冷静な頭の中でそう思っていた。

何にしても、ここでチップを渡すわけにはいかない。アリスは瞬きもせずに男を睨み付けた。

「良い度胸だ」

髭面の男はアリスを見て笑うと、トリガーにかけていた指に力を込めた。しんと静まった辺りにカチリと軽い音が響く。

「今から3秒間だけ待ってやる。数える間にチップを寄こしな」

アリスの首筋に汗が滴り落ちる。

「3……2……1……」

ゼロ。

男が最後の言葉を言い終える瞬間、アリスは素早く窓から飛び降りた。2メートルを超えるガラスが一瞬にして粉々になっていく。

重力に従い落ちていったアリスは、ゆっくりとその姿を闇に溶かしていった。

「おもしれえ奴だ」

男はそう言って帽子を引き寄せると、キラキラと光るガラスの破片を見つめた。

D I V A

第1話：良い度胸だ（後書き）

後書きと言う名の言い訳 ジャンル選択は迷った末にその他にしました。恋愛の方が色濃くなると思います。とりあえず髭面ダンディが書きたかったんです（笑）

第2話：どなた？

オレンジ色に染まる街のバーに轟く美しい歌声。その歌声を聞いた誰もが、彼女の虜になっていた。曲が終わりを告げるとともに、与えられる拍手はもちろん、金色の髪を靡かせる彼女のものだ。

「今日もいい声だなあ」

「こんな辺鄙な場所で埋もれてるのが勿体ねえな」

しゃがれた声の男たちがアリスの美声を称える。アリスはそんな男たちに、にっこりと微笑みを返した。

「アリス、今日こそデートしてくれるだろ？」

ジントニツクを飲み干した男が、物欲しそうにアリスに詰め寄る。

「遠慮しとくわ。また今度ね」

アリスは苦笑いをする、適当に返事をしてやり過ごす。やがてしつこい男も諦めて渋々と帰って行った。

アリスは昨夜の出来事を思い出し、小さくため息をついた。

D I V A

頭に浮かぶのは髭面の男。殺そうと思えば殺せた筈である。なのに、昨夜、アリスを狙っていた髭面の男は、アリスを撃たなかった。腕が悪いとは、どうしても思えない。では、なぜ撃たなかったのか。アリスは男の不可解な行動に疑問を感じていた。

どちらにしても、もう会うことはないだろう。昨夜はトレードマ
ークの金色の髪をすっぽりと隠し、汚れた布に身を委ねていた。ア
リスの陶器のように白い肌や、その可憐に美しい顔も布に隠れて見
ることはできなかったはずだ。今のアリスを昨日の怪盗と思う者は
誰もいない。

「昨日はどうも」

はずだったのだ。咄嗟にかけたれた言葉にアリスの心臓は
跳ね上がった。そして、声の主を確認するとそれ以上にアリスの心
臓は、鼓動を早めるのであった。

「どなた？」

目の前に現れた髭面の男は、昨日の男に違いなかった。アリスは
平然を装い、男を見つめる。

「話でもしねえか、歌姫さん」

男の口元が軽く弧を描く。男の独特のオーラに、アリスは思わず
息を呑んだ。男の存在感は、見るものを魅了し、どこまでも深い闇
に陥れる。そんな不思議なオーラにアリスは圧倒されていた。

危険なことは分かっている。しかし、アリスは何だか無性に目の
前の男に好奇心を掻かれていた。

「いいわ」

アリスは男の導くまま、酒場を出ると、太陽の光さえ遮る暗い路地裏に辿り着いた。何とも言えない異臭にアリスは顔を歪める

「で、話って何？」

「ICチップを渡してもらおうか」

男の口元が歪む。

「何のことだか、さっぱり。人違いじゃ……」

アリスが言い切る寸前、いきなり壁に押し付けられた。男はアリスに抵抗する余地も与えず真っ直ぐにアリスの目を捕らえた。

アリスの肩の上で切られた金色の髪が、風に揺ぐ。

「昨日は上手く化けたなあ、歌姫さんよ」

頬にあたるあご髭の感触。男の息使いまで聞こえるほど近い距離。アリスは男の存在感に圧倒されつつあった。

D I V A
男は全てを見透かしているような顔でアリスを見つめた。しかし、肝心な目は帽子の鏝で隠されており、男の真意を察することができない。

D I V A

呆然とするアリスを、男は鼻で笑った。

第3話：素直じゃねえ女は嫌いだね

「なん…で…」

今まで見破られたことの無い変装をいとも簡単に解いてしまった男に、アリスは少なからず恐怖感を抱いていた。明らかに今まで相手にしてきた輩とはレベルが違う。

「なんで分かったかって聞きてえのか。答えは簡単さ、おめえの匂いだよ」

馬鹿なことをした。アリスはそう思い、顔を青ざめた。疑いをかけられないよう昨夜も普段どおりに仕事が終わってから侵入したのだ。その時、フレンジグラスを付けたままで行動してしまった。昨日と同じフレンジグラスの香り。

鋭い男の洞察力にアリスは恐怖を感じずにはいらなかった。

「答えろ、ICチップは何処だ」

アリスを真っ直ぐに見つめる男の目は何処までも深い闇が広がっている。アリスは弱気な自分を奮い立たせ、男を睨み付けた。

「教える訳無いでしょう」

「素直じゃねえ女は嫌いだね」

男は片方の手で、アリスの両手を抑えた。

「離してっ」

男の手一つで全身の動きが拘束される。今まで男とそれなりに張り合ってきたのだ。男と女の力の差をこれだけ見せつけられるのは、初めてと言ってもいいくらいだろう。

アリスがいくら抵抗しても男の腕はビクともしない。

「あたしもあなたが嫌い」

アリスは大きく目を見開くと男の目を見据えた。

男はその視線を跳ね返すように、目を光らせた。急に真剣になった男の表情にアリスは恐怖を感じ身じろぐ。そんなアリスを嘲笑うかのように、男の手がアリスの胸の辺りを弄る。

「なっ、何すんのよ！」

「お前が女なら、口を割らせるのは拷問だけじゃねえしな」

男は抵抗するアリスを無理やりねじ伏せ、首筋を舐めるように顔を近づけた。アリスの首筋に当たる男の髭の感触。

「やああ」

アリスが何とも間抜けな声を出すと、男は急に手を止め、笑いを堪え始めた。

「……くっ、くっ！ 冗談だよ。俺はロリコンじゃねえんでな」

アリスはとてつもなく失礼なこの男を今すぐ殺してやりたい、そう思っていた。相変わらず笑いを堪える男の鳩尾を狙い、アリスは

力いっぱい足を蹴りあげる。

「おっと、危ねえ。言うこと聞かねえ悪い足はこうしねえと」

男は蹴り上げたアリスの足を持ち上げ、アリスを逆さ吊りにする。アリスの抵抗空しく、ついに軽々と抱き上げられてしまった。彼女の虚しい叫び声が辺りに響く。

「離して！」

「往生際がわりいなあおめえは」

男は状況を楽しむかのように笑い声をあげた。アリスの蹴りを容易に避けるとは、この男が只者では無いことだけは確かだった。

「あなた、一体何者？ 誰なのよ！」

アリスは男に抱きかかえられた状態で、未だに抵抗をし続けている。

「俺かあ？俺は佐久間だ」

「佐久間……」

どこかで聞いたような名だ。アリスはそう思った。

「さあ、嬢ちゃん。そろそろ、お寝んねの時間だ」

男の低い声が耳元で聞こえた瞬間、アリスは首筋に大きな衝撃を感じた。

「……っ」

だんだんと遠のいていく意識の中に、アリスはただ身を委ねた。

「ったく。強情な嬢ちゃんだ」

佐久間はようやく意識を失ったアリスを見て、ため息をついた。

第4話：関係ないでしょ、あなたに

アリスが次に目を冷ましたとき、初めに見たのは、新聞を読みながら紫煙を吐き出す佐久間の姿だった。

佐久間……どこかで聞いたはずだ。アリスは起きたばかりで朦朧とする意識の中で思った。死神の佐久間。有名な腕利のガンマンだ。風の噂で引退したと聞いていたが、まさかこんな所で会うなんて……。

アリスはすぐさま辺りを見回す。どれくらい気を失っていたのか。窓はしっかりとカーテンがひかれていて、太陽の光すら入らない。古ぼけたベットから立ちあがるうとするものの、体が言うことをきかなかった。手足が縄で拘束されていたのだ。

アリスは目の前で悠悠とコーヒーを飲む、髭面の男を思いつきり睨み付けた。

「ハゲ！ ヒゲ！ エロジジイ！ ロクデナシ！ 離して！」

佐久間は新聞に目を落としたまま、一向にこちらを見ようともしない。拘束している縄を解こうと力一杯足掻いてみるものの、きつく縛られた縄は余計にアリスの白い肌を蝕んでいく。アリスがのた打ち回る度、古いスプリングが悲鳴をあげた。

「離して！ 聞いているの、佐久間！」

「あ〜うるせえ！ お前、自分の立場が分かってねえようだな、お

嬢ちゃん」

散々と文句を撒き散らすアリスを、佐久間は見かね、ようやく新聞をテーブルに置いた。相変わらず帽子に隠された目が、とてつもなく恐ろしく感じられ、アリスは少し身じろいだ。

佐久間の手がアリスに近く。アリスは自分でも情けないほど体が強張るのを感じた。佐久間の手が、縄に触れる。すると、アリスを拘束していた縄がするりとベットに落ちた。

「なん……で……」

「あ？ まだ文句あんのか、お嬢ちゃん」

佐久間是不機嫌そうに声を荒げると、またさっきの場所へ戻り、新聞に目を落とす。一体、何なんだというのだ。アリスは、佐久間の考えていることがさっぱり分からなかった。これでは逃げて下さいと言っているようなものではないか。

「一体何を考えてるのよ、あなた」

「お前は逃げねえ、そうだろ？」

アリスはまるで心を見透かされたような感覚に陥った。佐久間は帽子を深く被せ、にやりと笑う。その表情は色気さえ感じさせる。アリスは一瞬でも佐久間に見惚れてしまった自分を恥じて、顔を赤く染めた。

「はっ、ちったあ女らしい顔もできんじゃねえか」

「うるさい！」

アリスは横にあった縄を力いっぱい投げつけた。佐久間は投げつけられた縄を片手で受け取ると、いらやらしい笑みを浮かべた。

「また縛られてえのか、お前は。ははあん、さては……意外とそう言う趣味か」

「そう言う趣味って何よ！ えろじじい」

「あつたまきた。やっぱりお前には縄が必要らしい」

佐久間はからかうような視線を向けアリスを見つめた後、1、2度咳払いをして真剣な表情を見せた。

「なあ、歌姫さんよあ、堅気の人間のお前がどうして盗みなんかしたんだ」

突き刺さるような眼差しにアリスは心臓を速まらせた。この男には嘘はつけない。なぜかそう感じていた。

「少なくとも私は堅気なんかじゃないわよ。今だってある男を殺したくて殺したくて堪らないんだもの」

「ICチップを盗んだのもそれと関係があるって訳か……」

佐久間の言葉にアリスは答えようとはしない。

「やめときな、嬢ちゃん。俺は人の事をとやかく言うような野暮じ

やねえ。だがな、おめえに人は殺せねえよ」

アリスは佐久間の言葉に少なからず衝撃を受けたようだった。何かを言いかけようとしたが、言葉を飲み込む。

暫くしてアリスは俯きながら呟いた。

「でも、私は両親を殺したあの男を許すことはできない」

「穏やかじゃねえなあ。その話詳しく聞かせてもらえねえか」

「関係ないでしょ、あなたに」

佐久間は静かに腰にかけた拳銃を取り出した。只ならぬ佐久間の様子に、緊張が走る。

「……本題に入りたい所だが、そうもいかねえみてえだな」

第5話：落ち着け！

拳銃を持って妙に真剣な眼差しをした佐久間に、アリスは言葉を失う。

「伏せる！」

佐久間の声が聞こえたと同時に、カーテンで隠されていた窓から何十発もの銃弾が飛びこむ。途端に響く、耳を裂く様な銃声。

「なっ……なに!？」

「いいから、伏せる！」

止まることの無い攻撃。

「痛っ」

アリスは銃弾を浴びて散り散りになったワインボトルの破片に躓いてしまった。尖った破片によりアリスは足首から膝までざっくりと切っている。アリスの白い肌に赤い血がじわじわと広がっていった。

「よそ見してんな、死ぬぞ！」

「分かってるわよ！」

アリスはずきずきと痛む足を引きずり、ソファの影へと身を移した。

「なんなの一体。まさか、佐久間。あなたの知り合い？」

「おめえのICチップを狙って来たに決まってんだろ！」

「じゃあ、私は行かなきゃ……」

銃弾のする方向へ行こうとしたアリスを佐久間は勢いよくひっぱる。

「何考えてんだ。死ぬぞ！」

「ICチップを狙っている奴らなら、私は会わなきゃいけないの！
離して！」

佐久間は動揺するアリスの肩を大きく揺さぶった。

「落ち着け！」

こうしている間にも奴らの攻撃は止むことは無い。佐久間を取り乱すアリスを宥めるように話し掛けた。

「おめえが何の理由で死に急いでるかは知らねえ。だが、目の前で死なれちゃあ、後味が悪い。話は後でだ。今はここから出る事が先

決、だろ？」

「出るってどうやって……」

佐久間の言葉に、冷静を取り戻したアリスは、佐久間を見て不安そうな表情を見せた。

「俺を誰だと思ってやる」

佐久間は髭を2、3回撫で、自信たっぷりに笑った。

第6話：変態、ロリコン、ヒゲ面！

「ちょっと待って。まさか、ここを通れって言うんじゃないでしょうね？」

アリスはいきり立つ男たちを、ガラスも粉々になった窓から覗いて言った。

「文句言うんじゃない。行くぞ、アリス。つくぞ、俺の大事な帽子が汚れちゃった」

佐久間はそう言うと、黒のボンブルグハットを大事そうに深く引き寄せた。

「か、勝手にあたしの名前呼び捨てにしないで！」

名前を呼ばれたことに動揺し、顔を少し赤らめたアリスは、それを気付かれないよう声を荒げた。

「なんでもいいから早く来い」

佐久間がアリスを覗き込むと、アリスは何かを隠すように俯いた。

「なにやってんだ。……っっておめえ、血が出てんじゃないか」

佐久間はアリスのしゃがみ込んでいる床に広がる赤い血を見て、顔をしかめた。

「こんなの大したこと無いわよ」

「はっ、ざまあねえな」

「うるさいわね、佐久間には関係ないでしょ」

佐久間は相変わらず吠え続けるサルに落胆すると、勢いよく抱き上げる。

「ちょっと離して！ 何すんのよ！ こんのえろじじい〜！」

「うっせえ、サル。犯すぞ！」

「変態、ロリコン、ヒゲ面！」

「あのなあ、ここにいて蜂の巣になるよりはいいだろうが」

アリスはもつともな佐久間の意見に、言葉を詰まらせた。さつきから黙っていたがアリスの足の怪我の具合が良くないのも確かだった。足が動かない今、悔しいが佐久間に頼るしかないのだ。

佐久間はアリスを背負うように体勢を変えると、ゆっくりと拳銃を構えた。

「まさか赤ん坊を負ぶって、銃をぶっ放すとは夢にも思わねえな」

「別に置いて行って構わないわよ。一人でも出れるんだから……」

アリスは突き刺さるような足の痛みを懸命に堪えて言った。

「よく鳴くガキだ！ 行くぞ！」

それからはあつという間の出来事だった。勢いよく家を飛び出した佐久間は、目にも止まらぬ早撃ちで次々と敵を倒していった。佐久間の大きい背中越しに見える銃撃戦は、妙な安心感すら感じる。それだけ佐久間の腕が良いのだ。

10人程の男たちが次々と倒れていく。佐久間は仕上げとばかりに手榴弾を投げつけ、庭の隅にとめておいたメルセデス・ベンツS SKに向かって走った。

「おめえは後ろで大人しくしてろ」

「ちよつ、……きゃあ！」

佐久間はアリスをS SKの後方座席に乱暴に押し込み、さっさとエンジンをかけた。

「もつと丁寧扱えないわけ！？」

「黙ってる！ 舌嚙んで死にたくなきゃあな」

アリスは一瞬うつと表情を曇らせ、口を硬く結んだ。佐久間はそんなアリスの表情ちらりとみて確認すると、思い切りアクセルを踏んだ。

第7話：わりいがあいにく縁遠い言葉でね

「アリス、ICチップを渡せ。おめえには、ちと荷が重すぎる」

佐久間は煙草を啜え、マッチを擦って火を付ける。時速何百キロと言っ速度で走る車に冷たい風が吹き付ける。

「嫌よ」

「なぜそんなに拘る」

佐久間は風に飛ばされないよう帽子を引き寄せ、紫煙を吐き出す。

「殺したい奴がいるって言ったでしょ。その奴がICチップを狙っているって噂を聞いたの」

アリスは試すような視線を巡らせる佐久間をミラー越しに見据え言った。

「このICチップを持っていれば奴は必ず私の前に現れるはずよ。だからICチップは渡せない」

「どこまでも強情な嬢ちゃんだ」

「それはどうも。で、このICチップに何の価値があるわけ？ あなたなら分かる筈よね？」

アリスはICチップを取り出し、訝しげに見つめた。

「ちょっと待て、お前、今どっから出した」

「どっからって、口よ、口」

大きく口を開けて舌を出すアリス。佐久間は一瞬驚いた顔を見せ、次の瞬間にはやられたと言う顔になっていた。

「くそっ、おめえの身体調べてもねえはずだ……まさか口ん中とは……」

「身体を調べた!? 変なことして無いでしょうね!?!」

青ざめた顔で佐久間を睨み付けるアリスを、佐久間は呆れたように諭す。

「安心しろ、ガキ相手に興奮するのはロリコンだけだからな」

「なっ! 失礼な人! これでももう20歳よ?」

「おめえが20歳!? どうみてもミルクから離れたばかりのガキだろうが」

「あなたこそ、ちょっとは礼儀を弁えたらどう?」

「わりいがあいにく縁遠い言葉だね」

「……もう、なんでもいいわ! で、このICチップに何の価値があるのよ!」

アリスは息も荒いまま、足を引きずり助手席へ飛び込む。そして、ICチップを佐久間の顔に突きつけた。

「危ねえだろうが」

佐久間は慌ててハンドルを切った。そして煙草を肺に思い切り吸い込むと、白い煙を吐き出す。それを何回か繰り返した後、アリスを見つめた。

「このチップの中身見たんだろ？」

「ええ、見たわ。でも中身はただ数字が並んでいるだけ。最初は暗号かと思っただけだけど、そうでもないみたいだし」

「そりゃあ、パスワードだ」

「パスワード？」

「この続きはアジトに帰ってからだ。どうも気がのらねえ」

「もったいぶらないでよ」

文句を言うアリスを横目に佐久間は強くアクセルを踏んだ。アリスは生殺しにされているような気持ち悪さを感じながら、流れる景色を見ていた。

第8話：私だって、毎月アレが来るわ

それから数十分車を飛ばして辿り着いたのは、古びた教会だった。どうやら追っ手も撒いたらしく。アリスは安堵の表情を浮かべる。

「こっちだ。ついて来い」

アリスは黙って佐久間の後を追う。佐久間はどんどんと先を行き、ついに教会の扉を開けた。

教会の入り口から真正面に大きなステンドグラスが連なっている。原色で彩られた神々に何となく気が引けたアリスは、佐久間に詰め寄る。

「こんな所に来てどうするつもりよ。アジトに行くんじゃないの？」

「ここがアジトですよ。正確に言うとな下こですが」

黙る佐久間の代わりに答えたのは、栗色の髪をした神父だった。いつの間にか現れた神父は床を指差すと、上品に微笑んだ。

神父の顔をまじまじと見つめたアリス。佐久間の色気とはまた違った魅力があるとアリスは感じた。端正な顔立ちに丁寧な話し方、どれも佐久間とは対照的だ。佐久間が30代だとすると、そのちょっと下の20代後半ぐらいだろうか。どっちにしてもアリスより年上には違いない。

D I V A

「初めまして、私はネスティと申します」

ネスティはアリスの手を取ると、口元に寄せ小さくキスをした。

「あ、あたしはアリスです。初めまして……」

ネスティのあまりに自然な仕草に、アリスは抵抗することを忘れてしまったかのようにただネスティを見つめた。

「胸くそわりい」

佐久間は、頬を染めるアリスを一瞥すると、愛用のペルマルに火をつけた。

「佐久間、ここは禁煙ですよ」

紫煙を噴かす佐久間を、ネスティは笑顔で制する。

「わーっ たよ。地下で吸やあいんだろ」

佐久間は猫のように背中を丸めて、教会の奥に進んでいく。

「全く、いい加減煙草も止めてくれるといいんですが。さあ、アリス、あなたもこちらへ」

「あっ、はい」

ネスティの囁くような言葉遣いに、アリスも自然と敬語になってしまう。死神の佐久間と呼ばれたあの男と一緒にいるぐらいなのだから、このネスティも只者では無いだろう。アリスは少し警戒しながら二人の後を追った。

二人の後を付いて行き辿り着いたのは、何の変哲も無い教会の
一室だった。本当に何も無い。たった一つあるものと言えば、古びた
パイプオルガンだけだ。

「ここがアジト？」

「いえ、下ですよ、下」

ネスティはそう言うと、床をスライドさせる。なるほど、スライ
ドした場所から出てきたのは地下へ続く通路だ。
佐久間は何も言わずにどンドン階段を降りていく。

「ちょっと待ってよ、佐久間……あつ」

アリスは階段を降りようとして、運悪く足を踏み外した。いつも
のアリスなら跳躍力を活かして華麗に着地する所だが、足に深手を
追っている今、まるでなす術が無い。アリスは思わず目を閉じた。

「よっぽど俺の事が好きらしいなあ」

佐久間は、覆いかぶさるように落ちてきたアリスを抱きかかえ不
敵に笑った。

「ちょっと何処触ってんのよ！ 離して」

「助けてもらって礼も言えねえのか、くそガキが」

「助けてくれてドウモアリガトウ！ それと私はガキじゃないわよ
！」

「どう見たってガキだろうが」

アリスは自分が大人の女性と言う証拠を見つけようとしてみたが、早々に見つかるものではなかった。自分で言うのも悲しいが、色気も何もあつたもんじゃなない。

「私だって、毎月アレが来るわ」

困った末に出たアリスの返答に、佐久間の顔が一瞬にして青ざめる。そうかと思うと、諦めのようなため息を深く吐いた。

「おめえは恥じらいつてもんがねえのか！」

「何よその言い方」

「まあまあ、こんな所で話もなんですから、お二人とも早く中に入つて」

そう言つて爽やかに笑うネスティ。その端正な顔立ちから放たれる笑顔を見たら、許さずにはいられない自分は、意外とミーハーなんだと感じた。

ネスティに諭され、二人は渋々と地下の部屋の扉を開けた。

第8話・私だって、毎月アレが来るわ（後書き）

アレが分からなかったらごめんなさい（笑）相当な自己満足だけの文章ですが、アドバイスいただけると幸いです。

第9話・それで、お前はどつするんだ。これから

「広い」

想像以上に広い地下室にアリスは思わず口に出した。

「まあ生活していく上で不憫なことは無いですね。シャワーもありますし。どうぞその辺にお掛け下さい」

アリスはネスティの言葉に甘えてソファにそつと座った。

「肝心な話を聞いてないんだけど。一体ICチップのパスワードって何なの？」

相変わらずヘビースモーカーの佐久間を見つめ、アリスは思いのほか真剣な眼差しで問う。

「おめえが見たパスワードはフィンデル銀行の金庫を開けるパスワードだ」

アリスは佐久間の意外な言葉に大きく目を見開いた。

「フィンデル銀行！？……確かに名前は有名だけど、お宝なんてありはしないじゃない。死神の佐久間と恐れられたあんたが、銀行強盗でもするつもり？」

「まさか、俺が狙ってるのはブルーダイヤさ」

佐久間にはやりと笑うと、ネクタイを緩める。

ブルーダイヤ、通称ホープダイヤモンド。それはかつて呪われたダイヤモンドと歌われたルイ14世のコレクション。その手の話に詳しくないアリスですら聞いた事のある品物だった。

「ちょっと待って、ホープダイヤは確かスミソニアン博物館に展示されているはず……」

「レプリカに決まってんだろ、本物はフィンデル銀行の檻の中さ」

「その檻を開けるパスワードがICチップの中身と言っわけです」

ネステイはアリスを見て、にっこりと笑った。

アリスは目を丸くしたが、暫くして状況が飲み込めたとばかりに微笑んだ。

「つまり、このICチップ自体には意味がないってことね。このチップの数字に意味があると……そういうことでしょ？」

「まあそうなりますね。実際ICチップで金庫が開くわけじゃありませんから」

「そう……」

「さあ、嬢ちゃん。こっちは何もかもバラしたんだ。いい加減、その殺したい程憎い奴の名前ぐらい教えてくれてもいいんじゃないか」

佐久間は癖のある笑い方でアリスに問いかける。アリスは何かを諦めたかのように、静かに話し始めた。

「信じられないかも知れないけど、私、そこそこの家柄だったの。それなりに財もあって、何不自由ない生活を送ってた」

アリスはICチップを手のひらで遊ぶようにして転がす。佐久間もネステイも黙って彼女の話聞き入る。

「でも私が8歳の時、ある男たちが財宝を狙って襲撃して来たの。目の前で両親を殺されて、幼い私は何もできなかった」

アリスは泣きそうになる自分を叱咤し、気丈に振舞う。

「その場から奇跡的に逃げ出せた私は、死に物狂いで男の正体を探ったわ。でも結局分かったのは、男の名前がBBっていうことと、腕に黒トカゲの刺青があったことくらい」

「BB……アイツのやりそうなことなあ。反吐が出る」

「佐久間、BBを知ってるの？」

「知ってるも、何も。俺らが敵にする相手、つまり盗み出す相手だからな」

「……！ BBがホープダイヤを持っているってこと？」

「厳密に言うと、ホープダイヤの持ち主の手下だな」

「じゃああの噂はデマだったのね……」

アリスが聞いた話ではBBがホープダイヤを狙っているとの事だったのだ。

「まあどっちにしても、BBとホープライヤが綿密に絡み合ってることは確かだな」

佐久間はそう言って笑みを浮かべた。

多少の誤算はあったとしても、やっと奴らとの接点ができた。アリスはそう思うと、震えるように心から湧き出でる憎しみをゆっくと噛みしめた。

「それで、お前はどつするんだ。これから」

「私は……」

BBを許すことはできない、必ず私の手で

アリスは大きく息を吸うと、ICチップを思い切り足で踏み潰した。佐久間とネスティに驚きの表情が映る。アリスは一か八かの勝負に出たのだ。心臓はどんとどんと速まって行くのに、やけに冷静な頭が矛盾を生み出していた。

「ねえ、取り引きしない？」

先程までの今にも泣きそうな表情から、うって変わったアリスの表情は驚くほど大人びていた。その憂いを含んだ女の表情に二人は思わず息を飲む。

「パスワードを知っているのはこの中で、私だけよ……あなたたち

がホーブダイヤを手に入れるには私が必要、そうでしょ？」

「つまり俺らと手を組むってことかい？ 嬢ちゃん」

佐久間は髭を2、3回撫でると、アリスを睨み付けた。佐久間の存在感到圧倒されそうになったアリスは、負けじと佐久間を見据えた。

「そつよ」

第10話：治るわ。3日だけ頂戴

「ホーブダイヤを盗む手助けをする代わりに、BBを殺すチャンスを作って欲しいの。悪い話ではないでしょう?」

アリスの言葉に黙り込む二人。暫くして沈黙を破ったのはネステイだった。

「話は分かりました。私はOKですよ」

ネステイはどうかやら条件を飲んでくれるらしい。アリスは安堵の表情を浮かべる。しかし、肝心の佐久間はアリスを睨んだまま一向に喋ろうとしなかった。

「佐久間、何とか言ったらどうです」

痺れを切らしたネステイが佐久間に詰め寄る。

「パスワードがねえんじや話にならねえ。話を飲むしかねえだろ」

佐久間はアリスから目を離すと、不機嫌そうに言った。

「それじゃあ……」

「素直じゃないですね、佐久間は」

ネステイは整った顔を少しも崩さずに笑った。

「でもアリス、何にしても行動するのはその怪我を治してからです」

ネステイに言われるまで足の怪我をすっかり忘れていたアリスは、痛々しい傷跡を見て苦笑した。

「あんまりゆっくりもしてられねえ。せいぜい4、5日つてところだな」

「治るわ。3日だけ頂戴」

佐久間は凜としたアリスの態度を驚いた表情で見つめた。

「ただのガキだと思ってたが、度胸だけは一人前のようだ」

「余計なお世話よ」

アリスは相変わらず憎たらしい態度の佐久間に舌を出した。

「さあアリス、その髭面は放って置いて。こっちにいらっしやい」

「なんだと、ネス」

吠える佐久間を尻目に、ネステイはアリスの肩をそつと引き寄せ歩き始める。アリスは二人の様子を見て可笑しそうに笑った。

D I V A

「ここがバスルーム。シャワーは何時でも好きなときに使って構いませんよ」

「ありがとう」

ネステイは丁寧にアリスに教えていた。天井は低いものの広い敷地にキッチン、シャワー、トイレと必要なものは全て揃っていた。一方佐久間はというと、帽子を顔に載せソファに横たわっている。

「で、問題はアリスの部屋ですね……。残念ながらここには、居間と私と佐久間の部屋しかないんですよ」

「あつ私ソファで寝るから」

「ダメですよ。アリスが風邪を引いたらいけませんからね」

ネステイはアリスの言葉をやんわりと否定し、佐久間の方を見る。

「煙草臭い部屋ですが、我慢して下さいね」

「ちょっと待て、ネス。まさか俺の大事なベッドを……」

「もちろん、佐久間はソファで寝て下さいね」

佐久間が言い終える前にぴしゃりと言いつつたネステイ。佐久間はがっくりと肩を落とした。

第11話：そんなに男の裸が珍しいか？

どうやらここではネスティの言葉は絶対のようだ。ずっと文句を言っていた佐久間も最終的にはソファで寝ることになった。お陰でアリスはふかふかのベッドにありつけたのだ。

しかし、身体は疲れきっていて眠りたいのに、頭が言うことをきかなかつた。今日1日で色んなことがあり過ぎた。アリスは諦めたかのようにそつと目を開けた。

「眠れない」

大きく息を吸うと煙草の香りが鼻を撫る。部屋には何も無く、あるのはテーブルに置かれた無数の吸殻だけ。佐久間らしい、とアリスは思った。

アリスは丁度良い沈み具合のベッドで何回か寝返りをうった。しかし、やはり眠れそうにも無い。

疲れた身体を引き摺るようにベッドから這い出たアリスは、居間へと続く扉をそつと開けた。寝ている佐久間を起こさないように気遣ったのだろう。

しかし、そこには佐久間の姿は無かった。電気スタンドの淡いオレンジ色の光だけがあたりを照らしていた。

奥のバスルームから聞こえる水音。どうやら佐久間はシャワーを浴びているようだ。まさか、シャワーを浴びている最中也帽子を被っているのではないか。アリスはそんな想像をして少し顔を緩めた。

「何笑ってるんだ。おめえは」

ふいにかけられた言葉にアリスは肩を小さく揺らした。振りかえった先には案の定、佐久間が立っていた。

「佐久間……」

アリスは佐久間の姿を見て、思わず息を呑んだ。先程までのブラックスーツとは違い、ジーパン姿に上半身は裸、首からはタオルがかけられている。まさに風呂上りの図式だ。ブラックスーツの上からでも容易に鍛えられた身体は想像できたが、実際にその実物を見るとやはり無駄なものは一切無い。その身体に刻まれているのは無数の傷。アリスはこの男の人生を垣間見るようだと感じた。

「眠れねえのか」

アリスは佐久間の言葉に小さく頷き、佐久間をぼんやりと見つめた。

いつもは帽子で隠されていた物がはつきりと捉える事ができる。肩に付く長さの黒髪、立派に蓄えられたあご髭。そして、初めて見る佐久間の瞳。切れ長の目は、心の強さを感じ、まさに自信に満ち溢れていた。

「そんなに男の裸が珍しいか？」

「ち、違うわよ」

佐久間の姿に見惚れていた自分を打ち消し、アリスは佐久間から

気まずそうに目を離した。佐久間は愛用のペルマルに火を付け、ため息を吐くように紫煙を浮かばせる。

「佐久間、怒ってる？」

「ああ？」

佐久間は質問の意味が解らないといった顔でアリスを見た。

「ICチップを壊した事。卑怯なやり方だったけど、ああするしかなかったの」

「いや、別に怒ってはいねえよ。ただ……」

「ただ、何……？」

アリスは遠慮がちに問う。

「おめえに人殺しはできねえ」

「どうして……？ そりゃあ佐久間みたいに腕は良くないけど、それなりに修行してきたつもりよ」

アリスは今までの自分を否定されているような気持ちになり、もう一度佐久間を見つめた。相変わらず広がる深い闇に、アリスはどうしていいか分からなくなる。

「一瞬の気の迷いは死を意味する」

「私は迷わないわ！ ただ殺すために生きてきたんだもの！」

「余計な事を考えるのはよせ。やめるなら今だ」

「嫌よ！」

「ったく。どこまでも強情な嬢ちゃんだ」

佐久間はソファに座り、滴る雫をタオルでわしゃわしゃと拭き取った。その動作がどこか見放されたように感じて、アリスの胸はチクリと痛んだ。

「まあいい。今日は寝るこつた」

寝ねえと疲れが取れねえからな。そう言った佐久間の顔をアリスは見る事ができなかつた。アリスの視界が歪む。

「おやすみ」

アリスは零れそうになる涙をそつと隠し、慌てて部屋に逃げ込んだ。

佐久間にどんな言葉を待っていたのか。佐久間の冷たい態度にどうして傷ついているのか。アリスはベッドに飛び込み、目を閉じた。今日は色んなことがあり過ぎた。きっと、頭が混乱しているだけだろう。明日になれば　　そう、明日になればいつもの自分を取り戻せるのだから。

第12話：好きじゃないけど、もっと知りたい

佐久間は食欲をそそるベーコンの香りと、心地の良い歌声を聞いてそつと目を開けた。暗い顔をしているものだと思っていたアリスの顔がやけに華やいでいる。

「おはよう、佐久間！ 朝ご飯できてるわよ」

アリスは眩いばかりの笑顔で佐久間に話し掛けた。一晩かけて導き出した答えは、なるようにしかならない、ただそれだけだった。その答えが今の自分には合っている。アリスはそう思った。

佐久間は一瞬戸惑ったような顔を見せたが、すぐにいつものも仏頂面に変わり着替え始めた。

「ちよつ、ここで着替えないでよ！」

アリスの言葉など気にもせずいつもの帽子を引き寄せ、ブラックスーツに身を預けると、佐久間は欠伸を一つ漏らした。

「ネスは？」

「買い出しに行った」

「足の具合は？」

「うん、何とか。今日、明日休めばイケそうよ」

「足手まといにならねえ為にも、ゆっくり休むんだな」

アリスは佐久間の言葉を聞くなり、佐久間の帽子を素早く取り上げた。立派なあご髭を持つ彼は、アリスをぎろりと睨んで不機嫌さを最大限に表現する。

「何すんだよ」

「今、どんな顔で言ったのかなあって思って」

アリスは佐久間の冷たい言葉に、佐久間なりの優しさを感じていた。佐久間は呆れたように、漆黒の長い前髪をかきあげる。そんなありきたりな動作までもが絵になるのは、この男を覗いては滅多にいないだろう。

「そんなに俺の事が好きなのか」

「好きじゃないけど、もつと知りたい」

佐久間はアリスの言葉に目を見開く。アリスはそんな佐久間を不思議そうに見つめた。

「馬鹿正直つつつか……。おめえは本当に餓鬼だな」

アリスの手元から帽子を剥ぎ取り、佐久間のため息混じりに言った。

「餓鬼じゃないわ。もう大人の女よ」

「ああはいはい、そうですね。気持ちわりいからこっち見て笑うな」

「ピッチピチの20歳の女に笑いかけて貰えるなんて、こんな幸せはないんだから」

聞かなかつた事にして黙々と朝食を摂る佐久間。ちよつとでも優しいと思つたのは嘘だつたと、アリスは剥れた顔で見つめた。

その後、買出しから戻つたネスティを加え、3人は作戦を練るところにした。

「あの警備を抜けるのは相当な力技になりそうですね」

「何してもセキュリティカードはねえと困るな」

「セキュリティカード？」

アリスは目を丸くして、詳細を問う。

「お偉いさんの社員しか持てねえ、カードさ」

「つまり、IDみたいなものでしょうか」

「へえ……」

佐久間とネスティの言葉にアリスは真剣に耳を傾ける。

「前から気になってたんだけど、どうして銀行の金庫を開けるパスワードが研究室にあったの？」

「あの研究室は表向きは医薬品の研究室だが、実際は人造ダイヤモンドの製造元なんだよ」

「人造ダイヤモンド！？」

「ええ、大分立ちの悪い方達ですね」

ネステイはさらりと言うとテーブルの上に紅茶をのせた。

二人の話を要約するところだ。アリスが盗みに入った研究室は、国際ダイヤモンド機構のルドルフの指揮の元、人造ダイヤモンドの研究に使われているらしい。その人造ダイヤモンドを本物と偽り、随分派手に儲けているわけだ。

スミソニアン博物館のレプリカもその人造ダイヤモンドの技術を用いて作られた。

ルドルフの卑劣さは裏の業界でも有名らしい。スミソニアン博物館から本物のダイヤモンドが消えたのも、裏で手を回したのだろう。問題はダイヤモンドを何処に隠すのか。そこで奴らが目を付けたのが、フィッデル銀行だった。フィッデル銀行は元々、ルドルフ系列の人間が管理していた。ダイヤモンドを隠すには持って来いの場所だったのだ。

「ルドルフが組織のトップなのね。つまりその手下がBB……そう言うこと？」

「ああ、そうなるな」

佐久間はアリスの問いに答えると、紫煙を吐き出す。少しずつBとの距離が近くなっていく。アリスはそう感じ、武者震いをした。

第13話：おめえは駄目だ。留守番でもしてろ

「脚の傷も残っていませんし、これなら十分でしょうね」

ネスティはアリスの脚の包帯を取り、満面の笑みで言った。あれから数日が過ぎ、アリスの怪我也完治した。そうなれば、いよいよ計画を実行する時が近づく。

「決行はいつ？」

「明後日の夜、フィンデル銀行でパーティが行われる。その時がチャンスだ」

「もうすぐ……あの男を……」

復讐をかなえる時がきたのだ。アリスは、震える手を懸命に抑えた。

「おい、ネス。明後日の準備だ。買出し行くぞ」

佐久間はSSKのキーを持ち、ネスティに言った。

「ええ、わかりました」

「待って、私も行くわ」

アリスは慌てて佐久間の後を追う。

「おめえは駄目だ。留守番でもしてろ」

アリスに冷たく言い放つ佐久間。佐久間の言葉に納得のいかないアリスは、思わず口調を強めた。

「どうしてよ！ 私も連れていって」

「アリス、すぐ戻りますから。留守を頼みます」

「分かったわ、待ってる」

アリスはネステイの言葉を渋々受け入れた。佐久間もネステイも、どこか様子がおかしい。アリスはそんな事を思った。

アリスを置いて、佐久間とネステイはSSKに乗り込んでいた。買い出しなんてハツタリもいいところだ。先程から、同じ場所をまさに堂々巡りしている。

「本当に連れて行く気か」

「何がですか？」

「惚けるのはよせ」

「心配ですか、彼女が。珍しい事もあるものですね。あなたが他人に興味を持つなんて」

ネスティは栗色の毛を風に靡かせて言う。佐久間は急に黙り込み、煙草に火をつけた。

「凶星を指された訳ですか。佐久間は本当の事を言われると黙り込む癖がありますからね」

そう言ってネスティは意地の悪そうに笑った。

「言ってる」

佐久間是不機嫌さを増して、アクセルを強く踏み込んだ。

第13話：おめえは駄目だ。留守番でもしてる（後書き）

次回には新しい仲間が出現します。

第14話：さ、佐久間が二人！？

アリスは戻ってこない二人をソファにうな垂れながら、待っていた。決戦の日を明後日に迎えた今、何をするにしても落ち着かないのだ。

自分の我侭に付き合ってくれている二人には本当に感謝している。しかし、アリスは佐久間の言った言葉が頭の奥にずっと引っ掛かっていた。本当にBBを殺すことができるのだろうか。アリスはそう思い、思いを巡らせる。

BBのこと、佐久間のこと、ぐるぐると考えるうちに、アリスは眠りに落ちていった。

「アリスちゅあん」

あまりにマヌケな声にアリスは飛び起きるようにして、ソファから身乗り出す。

「さ、佐久間……？」

アリスの目の前には、帽子を深くと被る佐久間の姿。しかし、アリスは違和感に首を傾げる。どこかいつもと違う佐久間。アリスは様子を伺うように、視線を上下させた。

「あれ……ネステイは？」

「ああ、野暮用があるとかないとかで、どっかいつちまったなあ」

「そうなんだ……」

「あんな奴のことよりさあ、やっと二人つきりになれたんたぜ？
楽しまなつきゃなあ」

佐久間は勢い良くアリスをソファへと押し倒す。疑いは確信へと変わる。

「佐久間、どうしたの？ 変よ？」

「俺が変なのは君のせいさ」

アリス目を丸くして佐久間を見つめた。こんな臭い台詞を佐久間が言うとは到底思えない。しかし、こうもしつかりと押さえつけられていれば、何も抵抗など出来なかった。段々と近づく佐久間の顔に、アリスはただ心臓の鼓動を速まらせた。

「いつもの佐久間じゃないわ……」

「今の方が良い男だろ？」

佐久間はそう言うと、アリスにウィンクをした。今、目の前にいる男は、アリスの知る佐久間ではない。アリスは佐久間を疑うような目で見つめた。

「冗談やめて、とりあえず離して」

「ん？ 嫌だね。据え膳食わぬは男の恥……そんなわけで、いただきます」

「なっ、何考えて……」

アリスは近づくと佐久間の顔に、思わず堅く目を閉じた。

「その前にてめえを三枚卸しにしてやるよ」

アリスと佐久間の距離が限りなくゼロに近づいた時、アリスの頭に聞き覚えのある声が響いた。

そこで、アリスが見たものは……なんと、拳銃を構える佐久間の姿だった。

「あらつま、早い登場なこと」

アリスを押さえつけていた佐久間は、銃を構える佐久間に対し、挑発するような笑みを浮かべる。

「さ、佐久間が二人！？何なのよ、一体」

何が何だかさっぱり分からない。アリスは二人の佐久間を何度も見て、自体を把握しようと努めた。

「アリス早くこっちに来い」

「佐久間……」

銃を持ち相当に不機嫌そうな佐久間の声。ああ、これが本当の佐久間だ。アリスはそう思い、少し安堵の表情を浮かべた。

「佐久間ちゃん、落ち着いて」

佐久間の身なりをした男は、アリスから手を離すと、めりめりという音と共に首から皮膚を剥ぎ取った。

「ひっ」

あまりに衝撃的な映像にアリスはその場に固まってしまった。

「アリスちゃん、怖いおっさんがいなくなったら後で続きしようね」

佐久間そっくりの人工皮膚を取った男は、まるで女のように美しい顔だった。ハチミツ色の長い髪は後ろで一つに纏められている。その長い睫毛も白い肌も、もしかしたら女より色気があるのではないかと思うほどだ。

「トイー、てめえそれ以上ほざいたら身体に穴開くぞ」

「じよ、冗談、冗談。いやあ佐久間ちゃんたら本気にしちゃって」

佐久間は顔色を一切変えず、男を睨み付ける。

「佐久間、何してるんですか。荷物持つの手伝ってください……」

奥からやって来たネスティは、トイを見てあからさまに嫌な表情を作った。

「トイ、何故あなたがここに」

「おめえら冷てえよなあ。お室は皆で分け合っつてのがルールでしょ?」

一人話しに付いて行けていないアリスは、きよとんとした顔で彼らを見つめた。

第15話：てめえは、よほど死にてえらしいな

「佐久間、どういうことよ！ 説明して」

「こつちが聞きてえぐらいだ」

混乱するアリスは、ソファから飛び起き佐久間を睨み付ける。

「トイー、あなた何故ここにいるのですか？」

ネステイの問いに、トイーはゆっくりと口を開いた。

「おめえらがホープダイヤを狙ってるって聞いてね。お手伝いしてやるうってな。やん、佐久間ちゃん、いい加減そんな危ない物はしまつてしまつて！」

相変わらず銃を構える佐久間に、トイーはおどけるように詰め寄った。佐久間は小さく舌打ちをして、銃を降ろす。

「それにしても本当に可愛いね、アリスちゃん」

「ちよつと、離して！」

トイーはアリスの肩をそつと抱いて近くへ引き寄せる。トイーの大きな瞳を向けられたアリスは、どうしていいか分からず黙り込んだ。

「てめえは、よほど死にてえらしいな」

佐久間は、降ろしかけた銃をもう一度構えると、目にも止まらぬ早撃ちでトイーに銃弾を放つ。トイーはその銃弾を避けるようにして、アリスから離れた。

「佐久間ちゃん、何すんの！ 死んじやうでしようが！」

「当りめえだ、殺そうとしたんだからな！」

本当に殺そうとしてるようには見えなかったが、佐久間の銃弾を避けるなんて、この男、只者ではない。もちろん、佐久間とそっくりに変装している時点で只者ではないのだけれども。

「怖え怖え。しかし、佐久間ちゃんが他人に執着するなんて珍しいねえ」

「おめえもかよ……」

佐久間は、ネステイに言われた言葉を思い出し益々眉間に皺を刻む。

「え？ どつたの、佐久間ちゃん？」

「うるせえ！ 大体……おめえの存在自体が珍しいんだよ。今まで何処に居やがった」

「ん、ちよつくら修行の旅に出てたのよ」

佐久間はトイーの言葉に呆れたように銃をおろした。

「なあにが修行だ。どうせおめえのことだから女の尻でも追っかけ

てたんだろつよ」

「当たったリー」

アリスはトイーの何とも軽い態度に、啞然とした。それは佐久間も一緒だったらしく、呆れ顔で帽子を深く被り直し、ソファへと座りこんだ。

軽い男は嫌いだが、なんだか憎め無い人だとアリスは思った。その証拠に、佐久間やネステイも不機嫌な態度は表しているが、本当に警戒しているようには見えない。見た所、トイーは彼らのトラブルメーカー的な雰囲気を漂わせていた。

「佐久間、何にしても変装の名人がお手伝いをして下さることですから、有難く受けましょう」

「ネスちゃん、相変わらず嫌味な男だねえ」

「お褒めに預かり光栄ですよ」

ネステイは満面の笑みで、トイーを睨み付ける。

「おお怖。……って俺、アリスちゃんに自己紹介してなかったね」

トイーは慌てて、手を差し伸べる。アリスは差し伸べられたトイーの手を握った。大きくごつごつと骨ばった手は温かかく、アリスはトイーの笑顔につられて笑った。

D I V A

「初めまして、トニーでいいよ、アリスちゃん」

第16話：そうするわ、おやすみなさい

新たにトイーも仲間に加わり、メンツとしては申し分ない。両親を殺され独りで生きてきたアリスには、皆で食べる食事も、洗面台の争奪戦も、どれも幸せに感じた。仲間がいると言っつのはこんなにも心強いのか。

しかし、平和な日々は長くは続かない。決戦の日はあつという間に来た。約24時間後には4人は大きな仕事をしなくてはいけない。もう後戻り出来ない。それはアリスが望んだことなのだから。

「ねえ後、どれくらい？」

「10分つてとこですかね」

アリス達を乗せた車が、夕暮れの街並みを軽快に走っていく。フインデル銀行の近くに高級ホテルを予約したのだ。いつもは地下で細々と生活をしている彼女たちが、一流のホテルに泊まるとなれば、もちろん心躍るだろ。

「ソファアで雑魚寝はウンザリ。ネスちゃん、もちろん一人一部屋だよな？」

D I V A

心躍る男がここにも一人。助手席に座っているトイーは後部座席のネスティを見て、まるで犬のように目を輝かせて言う。

「ええ。決戦は明日ですからね、ゆっくり休む為にも……」

「アリスちゃん、俺の部屋で一緒に寝ようね」

「トイー、聞いているんですか！」

「俺が手とり足とり教えてあげるから」

「トイー！」

ネステイの言葉も聞かず、アリスに詰め寄るトイー。ネステイの顔は相変わらず崩れもせず美しいが、そのオーラはどす黒い。アリスはそんな二人を見て、顔を緩めた。

明日はいよいよ決戦の日だと言うのに、何も変わらない態度。いつものように馬鹿馬鹿しくて可笑しい会話を、いつものように繰り広げる。経験を踏んでいる彼らには、どうってこと無い事なのだろうか。しかし、アリスはどうしても正気でいられなかった。まるで自分と闘っているようだ、アリスは感じていた。

「着いたぞ」

先程から黙々と紫煙をふかし、運転をしていた佐久間はぼそりと呟くと、そのままスタスタと歩いて行ってしまった。アリスは、慌てて佐久間の後を追った。

着いたホテルは、高級ホテルの名に恥じない堂々とした造りになっていた。ため息が出るような美しい外観も、すれ違う人々も、全てが別世界だ。アリスは自分とは全く不釣り合いなその環境に少し躊躇した。

「決行は明日の夕方。今日はもう遅いですから、皆さんゆっくり休んで下さい」

「じゃあ俺はちよっくら、バーにでも行って来ようかな」

「トイー、酔い潰れて使いもんにならなかつたら、どうなるか解つてんだろうな」

佐久間は癖のある笑いを、浮かれたトイーに投げかける。トイーは、まるで分かっているとも言いたげな自信満々の顔で、その場から立ち去っていった。

「トイーは放っておいて、私達は寝ましよう」

「アリス、トイーの馬鹿が来ても絶対、鍵を開けるんじゃねえぞ」

佐久間は愛用の煙草に火を着けながら、アリスに言い放つ。

「もちろん。それとあの馬鹿は変装して来るかも知れません。行動は慎重に。分かりましたか、アリス？」

念を押すようにネスティが詰め寄る。

「ネスティ、いくらトイーでもそんな事しな……、……するか」

「そう言うことだ。分かったなら寝ろ。明日は随分ハードな一日になりそうだからな」

「そうするわ、おやすみなさい」

D I V A

アリスは二人にそう挨拶をして、部屋へと向かった。

第17話：可愛くねえな

「若いアリスの見た惨劇はあまりに酷い。」

やめて、やめて……

「いやあ！」

アリスは勢いよくベットから飛び起きた。忘れる事のできないあの光景が、脳裏を掠めて行く。久しぶりに見た両親を殺されるあの時の夢。12年も経ったと言うのに、色褪せる事が無い。朦朧とする頭を引きずり、バスルームへ向かう。時計の針は既に新しい一日を知らせていた。後何時間かすれば……そう、BBを殺せば、この重苦しい過去から決別できるのだろうか。

シャワーの蛇口を捻り、頭から水を浴びた。動きやすさを重視して着ていた白のタンクトップと黒のホットパンツ。勢いよく流れた水を含み、どんどんと重みを増す。どれだけ頭を冷やしたとしても、どれだけ目を瞑ったとしてもあの光景は忘れる事はできない。

アリスは肌に張り付くタンクトップに顔を顰めた。絶える事の無い水滴は、涙なのか、それともただの水なのか、それすら今のアリスには分からなかった。

アリスは滴る雫もそのままに、部屋を飛び出した。無意識の内に

向かったのは、佐久間の部屋だった。

アリスは力なく佐久間の部屋のドアを叩く。

ゆっくりと開けられたドアから出てきた佐久間は、風呂上りなのか帽子を被っておらず、黒髪は無造作に流れていた。

「何考えてんだ、こんな場所で！」

「佐久間……」

佐久間は水浸しのアリスの姿を見て、ぎよつとした様子だ。アリスが何かを言う前に、強く引き寄せ部屋に押し込む。

「何があつた」

明らかに不機嫌な佐久間の顔。

「怖い夢を見たの」

「ああ？」

佐久間は呆れた顔でペルマルに火を付けた。紫煙を吐き出すと、アリスに向かいタオルを投げる。

辺りには電気スタンドの明かりだけが、輝いていた。薄暗い部屋では佐久間の姿も正確に捉える事ができず、アリスは佐久間がとても遠い存在のように思えた。

「こんな時間に男の部屋に来るって事は、どういふ事が分かってんだらうな」

「分かってる」

「分かってねえなあ」

「ちよっ……」

佐久間はアリスを抱えあげると、ベットに投げ込んだ。両腕を痛いくらいに押さえつけられたアリスは、抵抗するでもなくただ佐久間を見つめた。

アリスの華奢な身体が、息をする度に大きく揺れ動く。白のタンクトップは肌にぴったりと張り付いていて、アリスの身体のラインをまざまざと見せつけている。世の男が今のアリスの姿を見たら、誰しも理性を失うだろう。

佐久間は一度喉を鳴らし、何かを振り切るように目を閉じた。

「おめえには隙がありすぎる」

いつも以上に怖い顔。ゆっくりと開けた佐久間の目には、相変わらず漆黒の闇が広がっていて、アリスの心は強がかき乱される。

「わざとよ」

「可愛くねえな」

「甘え方を知らないの」

佐久間は小さく舌打ちをして、濡れたままの髪をかきあげた。

「泣けよ。まだ子供なんだ、泣いたって誰も責めはしねえ」

D I V A

た。
佐久間の言葉はアリスの冷えた身体にゆっくりと染み込んでいっ

第18話：言ったでしょ、甘え方をしらないの

「ホント子供。馬鹿みたいね、私」

アリスは押さえつけられた状態のまま悲しく微笑む。佐久間は弱った子供のようなアリスを見つめ、ため息をついた。

「餓鬼のお守りは苦手なんだがな」

アリスの白く透き通るような腕を引き、アリスをベットから起こして強く抱き寄せた。アリスの濡れた髪から落ちた雫が、佐久間の肌を伝う。

「佐久間、濡れるわよ」

「構わねえさ」

「煙草臭い」

「我儂な嬢ちゃんだ」

そう言った佐久間の声がいっつもより優しい気がして、アリスはふつと微笑みを漏らした。張り巡らされていた糸が切れたように、涙を流すアリス。佐久間は、腕の中で小さく震えているアリスを強く抱きしめた。

「怖い、凄く怖い」

「ああ」

「私はBBを殺せないかもしれない」

「ああ」

肯定もせず、そして否定もせずに佐久間はただ頷いた。

「母はね、BBに犯されて殺されたの。私は何も出来なかった……、怖くて怖くて動けなくて」

佐久間は何も言わずに、アリスを抱く手に力を込めた。

「奇跡的に逃げれたって言ったけど、本当は違うの。BBはワザと私を逃がした。その時言ったわ、私が大人になったら母と同じように殺すって」

取り乱すことなく、アリスは静かに涙を流す。

「佐久間は言ったわよね、一瞬の迷いは死を意味するって」

「ああ」

「もし私がBBに殺されそうになったら、佐久間、あなたが私を殺して」

佐久間は何も言わなかった。沈黙が辺りを包む。

「天国に行くなら佐久間の手がいいわ」

アリスはそう言うと、佐久間の顔を見据え笑った。そんなアリス

に佐久間はまるで試すかのような視線を巡らせる。

「守ってくれとは言わねえのか」

「言ったでしょ、甘え方をしらないの」

アリスは真つ直ぐに佐久間の目を捉えた。佐久間は何も言わない。いつもと変わらない佐久間の表情。その心情は読み取ることが出来ない。

「天国なら何時でも連れて行ってやる」

そう言つと佐久間はアリスを強く引き寄せた。頬にあたる髭の感触、煙草独特の甘い香りがアリスを優しく包む。

「そっか……ありがとう」

アリスは赤くなつた頬を隠すように、するりと佐久間の腕から逃れるとベットに潜り込んだ。

「ちょっと待て、お前何処で寝るつもりだ」

「おやすみ、佐久間」

アリスはひよっこりと布団から顔を出すと、佐久間の立派なあご髭にキスをした。そして何事も無かったかのように目を閉じる。

「おいっ。……ったく」

ぎゅっと目を閉じたまま、微動だにしないアリス。佐久間は隣で背中を丸めるアリスを呆れたように眺めると、煙草を取り出し火をつけた。

そして灰皿に煙草が何本か増えた後、ようやくアリスの静かな寝息が聞こえてきた。

「参ったな」

佐久間の言葉は静寂の中にそっと溶け込んでいった。

第19話：ったく。つくづく餓鬼だな、おめえは

「……る！」

「起き……！」

「起きろ！佐久間、コラ！」

佐久間はドアを乱暴に叩く音を聞き、やっと目を覚ました。ダルそうに起き上がり、ドアを開ける。

「遅いんだよ、佐久間っち！ てか、アリスちゃんも反応無しだし…… って、アリスちゃんなんでここに！」

佐久間を押しよけ、部屋に入ってきたトイは、すやすやと寝息をたてるアリスを見て青ざめた。

「朝からうるせえな、おめえは」

「はっ！？ どういうこと！？ まさか、佐久間ちゃん、ヤツちゃったん……！」

「おめえの頭の中はそんなことしかねえのか、ああ？」

「じゃあやってないって事？」

トイは興味深深と言った感じで目を輝かせた。佐久間はそんなトイを見て、大きなため息をついた。

「当りめえだ」

「ん……、佐久間おはよう。あれ、トイもいる。おはよう」

アリスはむくりとベットから起き上がった。

「よく眠れた？ アリスちゃん」

トイは黙っていれば男前の顔で、アリスに詰め寄る。その顔にはどこか意味有り気な様子が漂っていた。

「お陰さまで。なんか……喉渴いちゃった」

背伸びをしたアリスは、均等のとれた身体を弓のように撓らせた。そして、冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出すと、一口、流し込む。

昨日はとんだ醜態を晒してしまった、とアリスは思った。

渴ききつた身体に水分が補給されていく。アリスは昨夜の佐久間の力強い鼓動を思い出し、目を閉じた。佐久間の鼓動を聞いているだけで、強い生命の息吹を感じ、包まれるような安心感を得ていた。アリスの心の中で確実に佐久間の存在が大きくなっていく。アリスはそれを嬉しくも思い、また怖くもあるのだった。

「へえ、つまり佐久間ちゃんは美味しいご馳走が目の前にありながら、
“待て”の指示を出されたワンちゃんだって訳だ」

にやりと笑みを浮かべるトイ。佐久間はその問いには答えず、
ベットの脇のテーブルに置いた帽子を引き寄せた。深々と被った帽

子で目は確認できないが、どうやら凶星らしい。

「何の話？」

アリスは短いホットパンツからすらりと伸びた長くて白い脚を組みなおして言った。金色の髪は誘うように揺れ、青みがかった黒色の瞳は、清く美しい。端正な顔立ちも、華奢な身体も、今のアリスにとっては、磨かれていないダイヤの原石のようなものだ。

もし、アリスの女の部分が目覚めたとしたら……確実に世の男たちは彼女にお世直し跪く事になるだろう。

そんなアリスを見つめながら、トイは可笑しそうに言った。

「いいのいいの、アリスちゃんは知らなくて」

「ったく。つくづく餓鬼だな、おめえは」

「何よそれ……」

煮え切らないトイと佐久間の態度に、アリスは頬を膨らませた。

第19話：つたく。つくづく餓鬼だな、おめえは（後書き）

気付けば今までで、一番長い話となりました。ゴールは遠いですが、見捨てずに読んで頂ければ幸いです。

第20話：な、なんでもないわよ……

「そう膨れちゃあ可愛い可愛いアリスちゃんの顔が台無しよ?」

トイはいまいち納得のいかないアリスを宥めるように言った。

「佐久間には可愛くないって言われたけど?」

「佐久間ちゃんは好きな奴ほどいじめたくなる究極のS思考だから」

「あら、そうなの? 佐久間」

アリスはいつの間にかブラックスーツに着替えた佐久間を、けるつとした顔で見つめた。

「無駄愚痴叩いてねえで、さっさと支度しろ」

佐久間は呆れたように言い放つと、無愛想な態度で新聞を読み始めた。相変わらず手には愛用のペルマルを持ち、紫煙を立ち上げさせている。

自然に整えられたあご髭、面長の輪郭にはバランスよくパーツが並べられている。長身な身体にブラックスーツがやけに似合う。この男に泣かされた女はどのくらい居るのだろうか。アリスはそんな事を考えて、少しばかり眩暈を感じた。

「なんだ、さつきから」

佐久間はじつと見つめるアリスをじろりと睨むと、啞え煙草で言い放つ。佐久間に見惚れていたアリスは途端に目を泳がせる。

「な、なんでもないわよ……」

「佐久間！ いるんですか！」

アリスが佐久間から目を離れた瞬間、ネステイの声とドアを叩く音が部屋に響いた。

「ネスちゃんご登場」

トイは、おどけてそう言つと、軽やかにドアを開けた。

「おはようございます。皆揃ってますね」

ネステイは部屋を見渡し、爽やかな笑みを浮かべる。

「そろそろ行つちゃう？」

「ええ、そろそろホテルを発ちます。準備はいいですか？」

いよいよという緊張感がアリスを包み、無意識にアリスの手は震えた。

「やっと決着をつけられるのね……」

アリスは急に真剣な顔になり、呟く。佐久間はそんなアリスを見て、大きく頷いた。

「本日は当社フィッデル銀行設立100周年記念パーティーに参加頂き、誠に……」

大きなシャンデリアが飾られた会場では、華やかな衣装を見に纏った紳士淑女たちが、グラスを持ち乾杯の時を待つ。

あれからそれぞれ支度をした4人は、フィッデル銀行の3階であるパーティー会場に潜入していた。空もオレンジ色に染まっている。今の時刻は午後6時。

「準備はいいですか、アリス」

イヤホンから入ってきたネスティの声をアリスは、注意深く聞いた。

「ええ、OKよ」

アリスは300メートル程前にいるネスティを見て頷く。パーティー会場に潜入した4人は、それぞれ変装をしていた。佐久間とトイは警備員、アリスとネスティは招待客に紛れていた。

「アリス、今挨拶をしているのが組織のナンバー2のBBです」

アリスは目の前で乾杯の音頭をとる男を見据えた。忘れもしないあの顔が、今、目の前でのうのうと喋っている。白髪に浅黒い肌。顔には何十年分かの皺が刻まれている。品と言葉など微塵も感じられない、横柄な態度。ギラギラと滾らす視線はいやらしく、あ

の日の光景を呼び起こさせる。

「BB……」

アリスは吐き気がするほどの嫌悪感を覚えた。8年前母を、そして父を殺した張本人だ。アリスは今にも銃のトリガーを引いてしまいたいような自分を抑えるように、一気にワインを飲み干した。

「……ス、アリス」

「ああ、ごめんなさい」

「大丈夫ですか？」

「大丈夫よ。BBからカードを盗めばいいのよね？」

「ええ、そうです。盗んだ後は、生かすも殺すもアリスの自由です」

小型の無線機を通して聞こえるネスティの声はいつもと変わらなく落ち着いている。アリスは大きく息を吸い、乱れた呼吸を精一杯整えた。

第21話：はっ、相変わらず嫌な女だ

「アイツ、今にも殺しちまいそうな目をしてるな」

警備員の格好をした佐久間は、目のチカチカするようなモニタを見て言った。つい何分か前までここ場所にいた本物の警備員は、警備室のトイレでお寝んねをしている。強力な睡眠薬だ。丸一日起きる事は無いだろう。

「ホントに佐久間ちゃんが女の心配するなんて珍しいよね」

トイは佐久間を覗き込むと、可笑しそうに言った。

「黙ってる」

佐久間は煙草を吸いたくなつたのか、胸元のポケットから愛用のペルマルを取り出した。

アリスの任された仕事は、国際ダイヤモンド機構のナンバー2のBBを色香で釣り、セキユリティカードを盗むこと。アリスがセキユリティカードを盗んだら、4人は落合うことになっていた。

もともとBBの女好きは有名な話だ。佐久間が止めるのも聞かず、アリスは自分でカードを盗む事を志願した。今回の仕事が上手くいくも、失敗するも、全てアリスに掛かっている。

「アリスちゃんを信じなさい！」

佐久間はトイの勝ち誇った顔をウンザリと言った顔で睨み付けた。

「ほぐら、アリスちゃんが動き出した」

嚴重に張り巡っている防犯カメラをトイーは器用に切り替える。無機質な音を立て動いているモニタは、アリスの姿を徐に映し出す。

アリスは身に着けた事もないような、高級なドレスを身に纏っていた。更には滅多にしない化粧までばっちりとされている。トイーのテクニックは兎も角、早くセキュリティカードを奪わなくてはならない。

胸元の大きく開いた春色のパステルピンクのドレスを翻し、アリスが歩いていくと、男たちが一斉に振りかえる。

「おいおい……こりゃあ思ったよりも上玉だ」

モニタを通してアリスを見つめるトイー。

「佐久間もアリスちゃんに惚れなおしたんじゃない……っっていないし」

隣に居るはずの佐久間が居ない事に気付いたトイーは、モニタを見て口角を上げた。

「やっぱり、今回は尋常じゃなくマジみたいだねえ」

モニタを通して見たものは、いつの間にか着替えて招待客に紛れ込む佐久間の姿だった。

「ひどい歌だな」

「ああ、とても聞いてられない」

アリスの隣にいた男たちはホールで歌っている歌手に悪態をついた。確かに、ステージで歌っている歌手は、自分の世界にどっぷりと漬かっていて、とても感情移入できる品物ではなかった。演奏は悪くない、だがどうにも歌い手が良いとは言えないのだ。

アリスは生演奏を行っているホールへと向かった。一流の歌手が歌い終えた後、アリスはその歌手からそっとマイクを受け取り、ステージに立つ。

「BB様、お久しぶりです」

国際ダイヤモンド機構ナンバー2、BB。アリスは妖艶な笑みを称えながら、各界の著名人と話すBBに話しかける。BBは見慣れない顔のアリスを見て、顔を顰めた。

忘れもしない。あのアリスの母を犯し、そして殺した時の目。野獣のように貪欲で、そして悪魔のように卑劣なあの目。どんなに良い格好をしたとしても、その穢れた心は隠せはしない。

アリスは、呑気なBBの顔を見て、今すぐにも太ももに隠したナイフを投げつけたい衝動に駆られた。

「誰だね、君は」

「あら、嫌だわ。BB様、私をお忘れ？ カジノで会った夜、あんなに熱い時間を過ごしたと言っのに」

アリスがおどけた様にそう言うと、会場からは笑いと拍手がもれる。アリスは震える手をぐっと堪え、BBを見据えた。

「BB、歌ってもらってはどうか」

何処からともなく聞こえた低く威圧感のある声。アリスは一瞬、背筋が凍るような錯覚に陥った。

声の主を慌てて探すアリス。そこには中世的な見た目を持つ、男が立っていた。銀色の髪に、銀色の瞳、手にはグラスを持っている。若く見えるが、実際には幾つなのかアリスには検討がつかなかった。

「こんなに綺麗なお嬢さんだ、さぞかし歌声も綺麗な事でしょう」

男はアリスの目を真っ直ぐに捉えた。途端に、アリスの身体に電撃のような衝撃が走る。

「アリス、アリス……」

耳元から聞こえる佐久間の声。アリスは会場の隅からこちらを見ている佐久間を捉えた。佐久間は落ち着いた口調でアリスに問いかける。

「その銀色の髪の野郎がナンバー1、ルドルフだ」

この男が、何百いや何千もの部下を従え、組織を纏め上げているナンバー1、ルドルフ。アリスは男のオーラに圧されたかのように、少し身じろいだ。

「帰るか、お嬢ちゃん」

佐久間はそんなアリスをからかうように言った。アリスは佐久間を遠目で睨み付けると、無線のマイクに向かって小さく悪態をついた。

「嫌よ、おじ様」

「はっ、相変わらず嫌な女だ」

佐久間の心地よい低音の声のアリスの耳を駆け抜けていく。佐久間のサディスティックな言葉も何だか今は心地よい。案外自分はマゾなのかもしれない、そう考えたら緊張もどこかへ行ったらしい。佐久間の言葉に頷くように、アリスはそっと目を伏せた。

「100周年おめでとございませう。今日は皆様の為に心を込めて歌いますわ」

D I V A

アリスは演奏者に合図をして、歌い始めた。もはや会場の誰もが彼女の行動に釘付けになっていた。

D I V A

第21話：はっ、相変わらず嫌な女だ（後書き）

評価して下さった方、応援メールを下さった方、そしてD I V Aを呼んで下さる皆様、いつも本当にありがとうございます。書きたい事が多すぎて上手く纏まらないunicornですが、これからも精進致します。もう少しお付き合い頂ければ幸いです。

第22話：佐久間、ごめん

アリスはゆっくりと歌い始めた。曲はアヴェ・マリア。透き通るような声。アリスの歌声は、会場の招待客の耳に入り込み、心ごと揺さぶる。マイクを使わないでも、隅々まで轟く音量は流石と言った所だ。

アリスは両手を大きく広げ、まるで何かを掴むかのような仕草をする。幼いときの暗い過去とも今日でお別れをしなくてはいけない。蹴りを着けるのはあくまで自分自身でだ。アリスの歌声を聞く観客達は、息をするのを忘れてしまったかのように、アリスに魅入っていた。

彼女が歌い終わった時、会場に割れんばかりの拍手が起こった。

BBでさえ、必死に拍手をしている。

「BB様、お気に召しましたでしょうか」

アリスはゆっくりとステージから降り、BBの元へと歩み寄る。

BBは白髪を振り乱しアリスの腕を引いた。

「素晴らしい！ カジノで会ったと言ったね？ すまんが、名前を教えてはもらえんか」

「マリアと申します」

アリスは息を整え、そう答えた。マリアとは……アリスの母、B

Bが屈辱を与え殺した女の名前だった。

アリスはBBの反応を確かめるかのように、微笑んだ。

「マリア……そうか、今度こそ忘れないようにしないとな」

BBはアリスを真っ直ぐに見据え、動揺一つせずに言い放った。

「マリア、あなたの歌声はまるで天使の囁きだ」

隣にいたルドルフがアリスを見て、微笑む。アリスは妙な違和感を感じていた。本当に、この紳士を絵に描いたような男が、卑劣で傲慢と言われる国際ダイヤモンド機構のトップなのだろうか。

「ありがとうございます」

ルドルフに対して一礼をしたアリス。

ルドルフに対する違和感は今の問題ではない。一刻も早くキュリテイカードを奪わなくては……。アリスはルドルフから視線を逸らし、BBを捉えた。

「ねえBB様、二人きりで話しませんこと？」

「いいだろう」

アリスの誘いにBBは妖しく微笑んだ。

「アリス……アリス、おい、何考えてやがる。勝手な行動は……！」

「佐久間、ごめん」

無線から焦ったような佐久間の声がアリスの耳に響いた。アリスは、深呼吸をすると無線の電源をそっと切った。

「おい、アリス！アリス！」

「佐久間どうしたんです、一体？ アリスの声が急に聞こえなくなりましたが……」

「あいつ無線の電源を切りやがった。くそっ」

アリスが無線を切った後、佐久間はすぐにアリスの後を追った。しかし、もうすでにアリスはBBとともに会場を出ていた。こんなに多くの客がいる会場だ。一人探すのだって至難の業だろう。ネステイの耳に佐久間の舌内の音が空しく響く。

「どこまでも手の掛かる嬢ちゃんだ」

もっともな佐久間の言葉にネステイは苦笑をした。

第23話：そのクソ餓鬼のペピーシッターさ

BBに連れてこられた部屋はパーティ会場から何階か上の部屋だった。悪趣味なソファに、高価な装飾の数々。どうやらBBのプライベートルームらしく、辺りには誰も見当たらない。まさに二人きりの絶好のチャンスだった。

勝手に行動したアリスを今頃、佐久間達は怒っているだろうか。アリスの頭にふとそんな事がよぎった。

「マリア、さあ、もつとこっちへ来い」

アリスはBBに腕を掴まれ、ソファーに引き寄せられた。BBはアリスの身体をまるで舐めるかのように入念に触った。アリスは嫌悪感に思わず悪態をつきそうになるが、ぐっところえ笑顔で繕う。

「良い女だ」

これがもし佐久間に言われたとしたらどんなに良かったか。アリスはこんな状況で、不謹慎な事を考える自分に苦笑をし、ゆっくと太ももに隠したナイフを探った。

「BB様」

「何だ、マリア」

「本当に私の事を覚えていらっしやらないの？」

アリスがそう言ったのと同じに、BBの顔に少しばかり動揺が広がる。アリスのナイフはBBの首元を確実に捉えていた。少しでも

動けば切れ味の良いナイフがBBの喉元を切り裂くだろう。いくらナンバー2と歌われるBBでも、こんな体勢にされては一溜まりもない筈だ。

「くはっ、ははは！」

絶体絶命に陥っているはずのBBはアリスを見て高らかに笑った。

「何がおかしいのよ」

アリスは高笑いをするBBを訝しげに睨み付けた。

「お前からわざわざ出向いてくれるとはなあ。覚えているとも……お前はマリアの娘、アリスだ」

「そう……覚えていてくれたとは光栄ね」

「忘れる筈がない。マリアは、それはいい女だったからな。そう言えばアイツもいい声で鳴いたなあ」

BBの言葉にアリスは頭に血を上らせた。アリスはゆっくりとナイフを持った手を動かす。BBの首筋から赤い血がすうっと流れた。

「今すぐ殺してやってもいいのよ」

「母親そっくりだ。いい女になった」

BBはアリスを舐めるように見つめた。

「あんたのその目、大っ嫌いよ」

「お前には俺しかいない。そうだろう？ 事実、お前は俺に対する憎しみだけで、生きてきた」

「違う」

「いや、違わないなあ。お前は俺を殺すためだけに生きてきた。つまり俺はお前の全てなのだ」

BBはナイフを素手で掴みとると勢いよくアリスの手から引き抜いた。BBの手の平から血が滴り落ちる。何と言う精神力だ。BBは痛みなど感じていないかのように、平然としていた。

「さあ12年前の約束を果たそうか」

「痛っ！」

一瞬アリスがひるんだ隙に、BBはアリスの腕を引き思い切り床に叩きつけた。そして目にも止まらぬ速さで、アリスの両手を脂ぎった腕で拘束する。アリスがいくら抵抗してもビクともしない。アリスはBBの汚らしい目を見て、改めて恐怖を感じた。

「離して！ いやあああ！」

BBの手がアリスの体中を探り始める。アリスの頭の中には、12年前、無残に犯され殺された母の映像がフラッシュバックしていた。

「じきに良くなるぞ」

そう言うとBBはアリスのドレスを胸元から勢いよく引き裂いた。体中を這いつくばる悪魔のような手は留まる事を知らず、アリスの胸を強く揉みしだく。

早く助けを呼ばないと本当に殺される。無線の電源を入れればいい。耳元にある小型無線の電源を触ればいいだけ。しかし、頭とは裏腹にアリスの体は全く言うことをきかなかった。今頃になって恐怖心がアリスの体を蝕んでいた。アリスは思わずぎゅっと目を閉じた。

「おめえのテクニクじゃあ濡れるもんも濡れねえなあ」

「誰だお前は！」

突然聞こえた声に、BBは白髪を振り乱して振りかえった。そこには、佐久間の姿があった。佐久間はゆっくりと拳銃をBBに向ける。

佐久間の顔は一発で怒っている事が分かるぐらい、冷たくそして残酷な表情をしている。

「そのクソ餓鬼のベビーシッターさ」

アリスは、銃を構え狙いを定める佐久間の姿に、ぞくりとした色気を感じた。

D I V A

第24話：佐久間、撃って

「勝手に行動しておいて、自分だけお楽しみとは良いご身分だなあ、アリス」

佐久間はそう言って、アリスを見るとにやりと笑った。顔は笑っているがよほど怒っているのか、声は全く笑っていない。

「悪かったわよ」

「やけにしおらしいじゃねえか」

佐久間はBBを見据えたままそう言うと、静かにトリガーを引いた。

「おいおい物騒なもんはしまいな。この女に傷をつけたくないだろ？」

BBは先程アリスから奪い取ったナイフをゆっくりとアリスに突きつけた。睨めっこでもしているように、佐久間もBBも一步も譲らず動こうとしない。

「早く銃を降ろしな」

BBはこの状況を楽しんでいる。明らかにそう言う顔で、ナイフをアリスの喉元に突きつけた。アリスは自分の不甲斐なさに、唇を噛む。

D I V A

「佐久間、撃って」

「ああ？」

佐久間は意味が分からないとでも言いたげにアリスの顔を睨み付けた。

「私の事はいいから、撃つて」

「アリス、そう言う考え方は頂けませんねえ」

「そうだな、アリスちゃんはやっぱり強気じゃないと」

突然、趣味の悪い机の影から現れたネスティとトーイは、BBに向けて銃を向けた。

「ネスティ！ トーイ！」

「さあどうするBB。3対1だ。勝ち目がないのは分かってんだろっ？」

「3対1？ 可笑しな事を言う奴だ」

BBは佐久間を見据えると、口角を上げた。その笑みには妖しさが含まれている。

「3対20ぐらいが妥当だろう？」

BBの言葉を理解するかしないかの一瞬。天井から銃を所持したスナイパーが一齐に降りてきていた。その数はざっと20を超える。

「マ、マジ!?」

トイは先程までのぼつちり決めた顔から急に間抜けな顔を見せた。それはアリスを含めた全員同じ気持ちだったらしい。

「くそっ!」

佐久間は狙いを定めるとBBのナイフを持つ手を撃ち抜いた。弾は見事にナイフを貫き、反動でBBの手からするりと抜けていった。BBはうめき声を上げ、その場にうな垂れる。それもそのはずだ。当たっていないとは言え、手の骨の一本や二本余裕で折れているだろう。

「アリス、私から逃げられると思うな」

佐久間達の所へ向かおうとするアリスを、BBは片方の手で精一杯引き寄せていた。その目は、アリスを母を犯した時のあの目のま

ま。
「確かに私は憎しみだけで生きてきた。でももう終わり」

アリスは床に落ちたナイフを拾うとBBの心臓目掛け、力いっばい突上げた。BBは顔を顰め、ゆっくりとソファに落ちていく。

アリスは広がっていく血を見て、涙を流した。やっとBBから…いや、BBへの憎しみから開放される。これで両親がうかばれるかと言ったら嘘になるかもしれない。だが、これがアリスなりの決着の仕方だった。

「アリス！ 来い！」

佐久間の声に促され、アリスは力一杯走った。信頼する仲間の手へ、そして誰よりも愛する男の所へ。佐久間はアリスの手を引き、強引に引き寄せた。

「その泣き顔そそるじゃねえか」

「馬鹿！」

アリスは佐久間を見上げた。ピンチに追いやられていると言うのに、佐久間の顔はいつもと変わらず、とても冷静だ。誰よりも憎たらしくて誰よりも愛しい。

憎しみだけを心の糧に生きてきたアリスだが、どうやらそれも終わりを向かえる。この男には一生勝てないだろう。アリスは流れ出る涙を乱暴にドレスの裾で拭き取ると、銃を構えるスナイパー達を睨み付けた。

第25話：今鳴いた鳥がもう笑ってやがる

スナイパーはBBの死を確認すると一斉に銃を放った。佐久間達は、一切怯まず確実な腕で一人ずつスナイパーを仕留めていく。しかし、倒しても倒しても新しいスナイパーがアリス達を目掛け銃を放ってくる。

「つたく、キリがねえ！」

「佐久間ちゃん、神にお祈りでもしちゃう？」

「余計な事言つてねえで、何とかしろ！」

「こういう時は、逃げるが勝ちです」

ネスティの言葉に同意した3人は、非常階段へと走った。

「アリス！ どこ行くんだよ！ そっちは……」

「ホープダイヤを盗むんでしょ？ 私中途半端は大嫌いなもの」

アリスは上へと続く階段を上り始めた。アリスはホープダイヤを盗む事で最後の決着をつけたかったのだ。BBへの憎しみも、辛い過去も。アリスは確実に未来へと進もうとしていた。

「しかしセキュリティカードがなければ、例えパスワードが分かっていたとしても金庫に入るのは難しいかと……」

「セキュリティカードってこれの事？」

アリスは一枚のカードを差し出し、ゆらゆらと左右させた。それは明らかに佐久間達が求めていたものであった。佐久間は一瞬驚いたような顔を見せ、真剣な顔つきでアリスを見据えた。

「さっき、逃げる時、BBの懐から頂戴したの」

アリスはそう言うと舌を出して笑った。

「だってさ、佐久間ちゃん」

「……ホントに感心するよ、おめえには」

ぶっきら棒にそう言った佐久間の声が、アリスはどこか笑っているように感じた。

「ルドルフ様、お疲れ様でございます！」

「ああ……ご苦労」

組織のナンバー1であるルドルフに警備員たちは、丁寧に辞儀をした。

「ここから先は関係者以外立ち入り禁止ですが……」

二人の警備員は、ルドルフの後に続く、髭面の男と、敗れたドレ

スを身にまとう女、そしてスーツを着た端正な顔の男を、怪訝そうに見つめた。

「ああ良いんだ、この物達は私の連れだ」

「失礼しました！」

深々と礼をする警備員たちを尻目に、ルドルフ達は先を急いだ。

「ホントにトイーの変装は神業ね」

アリスはルドルフに化けたトイーの姿を、視線を巡らせまじまじと覗き込む。

本当にこの男たちの能力は並みではなかった。普段はおどけているが、銃の腕は天下一品だ。先程のあれだけの数のスナイパーも、結局ものの10分程度で全滅させたのだから。

「まあ俺様に掛かればちよちよいのちよいよ」

「馬鹿にも1つくらい取り柄がないと困りますからねえ」

ネスティはトイーを一瞥すると、満面の笑みでそう言う。ネスティの言葉にうな垂れるトイーを見て、アリスは頬を緩ませた。

「今鳴いた鳥がもう笑ってやがる」

佐久間はアリスを見て、先程とはうって変わった優しい笑顔を見せた。

「煩い！ 大体なんでもっと早く助けに来ないのよ」

「ピンチの時に現れなきゃ、有り難味がねえだろ？」

照れ隠しでもするかのように素直じゃないアリスを、佐久間は煙草を啜えたまま意地悪な笑顔で見据えた。

「サデイスト！」

アリスの言葉を聞くなり、佐久間は低い声で笑う。

銃を撃つ時の怖いくらいに色気のある姿も、意地悪な事を平気で言う姿も、何もかもが愛おしい。アリスは佐久間の知らない姿を見るたびに自分の気持ち膨らんでいくのを感じていた。

「気付かれるのも時間の問題だ。さっさと済ませるぞ」

「ええ、先程のスナイパーの残骸を見つけたら、奴らも躍起になつて殺しに来るでしょうから」

「ふんっ、ご苦労なこつた」

佐久間は帽子を深く被り直し、にやりと笑った。

ホープダイヤを盗み、無事脱出できたら……それからどうなるの
だろうか。アリスの頭に一抹の不安がよぎる。

佐久間の事だ。特定の女を傍に置いておくなんてしない筈だ。今

アリスと一緒に行動している事さえ、珍しい事なのだから。

「行くぞ、アリス！」

いつの間にか先を進んでいた佐久間は、立ち止まっていたアリスを呼んだ。相変わらずの無愛想な表情の佐久間。アリスはそんな佐久間に苦笑すると、不安を振り切るかのように、佐久間の後姿を追った。

第26話：お手付きあり？

それから5分ほど回廊を歩いた所に、2メートルを超える巨大な金庫が現れた。仰々しいセキュリティシステムは、アリス達の期待をますます膨らませる。

「でけえなあこりゃあ、トーチちゃんも吃驚！」

「BBやルドルフが私欲の限りを尽くして得た財宝が眠ってたんだ、当り前だ」

「アリス、セキュリティカードを」

ネステイはアリスからカードを受け取ると、インターホンのような形のセンサーにカードを差し込む。すると、赤のランプから緑のランプへと変わり、GOサインが表示された。

「ビンゴ！」

巨大な扉が音を立ててゆっくりと開いていく。そこには中世のヨーロッパを思い出させるような、綺麗な装飾のされた柱が連なっており、先ほどと同じような巨大な扉が存在している。

「アリス、おめえの出番だ」

「OK」

佐久間はクリスタルで出来ているらしい台の上の小さなキーボードを顎で指し示す。アリスは敗れたドレスを捲くり上げ、キーボー

ドの前に立った。

「お手付きあり？」

「なしです。一度でも失敗すると警報がなる仕組みですから」

悪ぶる様子もなくさらりと言いのけたネスティの言葉に、アリスは思わず息を飲んだ。

アリスと佐久間が出会ったあの日。アリスがICチップを壊して、強引に佐久間達を巻き込んだのも何だか遠い事のように感じられる。今、ここに佐久間達とこうしている事が、アリスは奇跡のように思えた。本当に皆と出会えて良かった、心からそう思った。

アリスは、思い出を紐解くかのように頭の中にパスワードを描き、徐にキーを叩き始めた。佐久間達は真剣にアリスの手元を見つめる。

「認識完了。扉を開きます」

独特の機械の音声が当りに響く。

「開いた！」

「上出来だ」

佐久間は低く呟くと、アリスの金色の髪をくしゃくしゃと撫でた。その子供のような佐久間の笑顔は、アリスに眩暈すら感じさせる。

「な……んだ……これ」

トイは目の前に連なる宝石の数々に思わず言葉を失った。扉の向こうには溢れんばかりの宝石、装飾が所狭しと並んでいる。

「凄い！」

「この中からホーブダイヤを見つけること自体が大変そうですねえ」

ネステイの言葉にアリスは笑いながら頷いた。

「しかし、思った以上だな……」

佐久間は数ある宝石の中から、エメラルドのはめ込まれたネックレスを取り出した。そのネックレスは、小粒ながら存在感のあるエメラルドが、銀色の縁に行儀よくのっっている。とても上品なネックレスだった。

「……！ ちょっとそれ見せて！」

アリスは佐久間の手から受け取ると、ネックレスを入念に見つめる。

「どうした」

「これ……母のだね。そうよ……母がいつもしていたネックレス」

アリスはそう呟くと、急に黙り込む。

「アリス……」

アリスは、ネステイの声に一瞬肩を揺らし、咄嗟に顔を上げる。アリスの顔には落胆にも似た表情が広がっていた。

「あつごめんごめん。まさかこんな所にあるなんてね！ほんつとにBBってやな奴だったわ」

アリスはネツクレスを握り締めると、いつものように気丈に振舞った。佐久間はそんなアリスを見て、ため息を付く。

アリスは佐久間のため息が、自分を弱い人間だと言っているようで怖かった。妙な焦りがアリスを攻め立てる。独りで生きてきたアリスには甘える術も甘えられる環境もなかったのだから……

「餓鬼が我慢してんじゃねえよ」

佐久間の言葉に驚いたアリスはゆっくりと顔を上げた。

「アリス、もう貴方を縛るものは何もないのですよ」

ネステイはそう呟くとアリスの頬にそつと触れた。

「そうそう。なんたって俺たちが付いてるんだから」

トーイはそう言ってアリスに向かってウィンクをする。ルドルフ

の変装をしたまま言うトイ。アリスはその違和感に顔を緩めた。

佐久間は、アリスの手にしっかりと握られていたネックレスとすりと奪うと、アリスの後ろに回りこんだ。佐久間の長くて男っぽいごつごつした骨ばった指が、アリスの首元にネックレスをかける。アリスは佐久間の吐息にどきまぎしながら、胸元でキラキラと輝くエメラルドを見つめた。

「似合うぜ」

口角を上げ、妖しいまでの笑みを浮かべた佐久間。佐久間の顔を見上げると、アリスの頬に自然と涙が零れた。

両親を殺され、BBを憎む事で生きてきたアリス。そんなたったひとりだったアリスに出来たかけがえのない仲間。BBに会い、そして復讐を果たした。今までの思い出が怒涛のように蘇ってくる。アリスは過去の渴ききつた傷跡を潤すように涙を流し続けた。

「やっぱりおめえのその泣き顔は最高だよ」

「サド！ エロ！ オヤジ！ ヒゲヅラ！」

流れ出る涙もそのままに悪態をつくアリスを、佐久間は大声で笑った。こんなにも思ってくれている仲間たちがいる。アリスは頬を流れる涙さえも温かく感じていた。

D I V A

第27話：おめえは黙ってる！

「皆ありがとう」

アリスは涙を両手で拭き取ると、子供のように目を細めた。ネスティもトーイもそれにつられる様にして笑顔になる。

しかしその笑顔も次の瞬間には、真剣な顔つきになっていた。アリスがそんなネスティ達に何かを言いかけたその時……

「伏せる！」

佐久間の声と、鼓膜が破れるほどの銃声が辺りに響き渡る。アリスは勢いよく腕を掴まれ、佐久間の胸へと引き寄せられた。虹色に輝く宝石達を乗せた柵の隙間から、ルドルフの部下がこちらに向かって銃口を向けているのが見える。

「厄介な奴らのお出ました」

佐久間はルドルフを見てそう言うと、素早く銃口に弾を詰めた。

「本物が現れちゃあしょうがねえってな」

トーイは余裕の表情でそう言うと、首からめりめりと人工皮膚を剥がしとった。何度見てもその光景は異質なものであり、慣れることとはない。

「アリス、俺から離れるんじゃないぞ」

「分かってるわよ！」

アリスは狙いを定める佐久間の横顔を見て、慌てて護身銃を探った。辺りには静か過ぎるほどの沈黙が流れる。

「これ以上無駄な死人を出すのは止めませんか」

沈黙を破ったのは他でもなくルドルフ自身だった。

「私欲の限りを尽くしてきたアンタがよく言ったもんだ」

佐久間はゆっくりと立ち上がるとルドルフの目の前に躍り出た。

「死神の佐久間。まさかこんな所で貴方に会えるとは……。しかし、私ももう歳です。引退を考えてるんですよ。何ならここにある全ての宝を貴方たちに譲りましょう」

アリスはルドルフの言葉に耳を疑った。一体ルドルフは何を考えていると言うのだ。アリスの心に不安がよぎる。

「随分と紳士な対応だなあ。悪魔と恐れられたアンタが」

「条件があります。マリア……。いえ、アリスでしたね。アリスを私に受け渡してもらいます」

ルドルフの声はとても落ち着いていた。その風貌は紳士以外の何

者でもなく、アリスは困惑をする。

「ちよつと待つて、人を物みたいに言わないで！ 大体、何よそれ！ 随分と勝手な事言ってくれるじゃない！ アンタみたいな……むぐっ」

「おめえは黙つてろ！」

銃を向けられているにも関わらず、づかづかと前に行くアリスを佐久間は強く引き寄せ、口元を抑えた。アリスは佐久間の腕の中にすっぽりと納まり、すっかり身動きがとれなくなっていた。

「まさかルドルフ、おめえにロリコンの趣味があつたとはなあ」

アリスはこんな時でさえ、サディスティックな事をのうのうと言いのける佐久間を、佐久間の腕の中からぎろりと睨んだ。

「無駄話もほどほどにしましょう。悪い話ではないでしょう、死神の佐久間」

「もしアリスを受け渡すのを断つたら……」

「その時は残念ですが、皆様には死んでもらいますよ」

ルドルフの猟奇的な笑顔にアリスは、背筋の凍る思いがした。

第28話：天国に連れてってよ、佐久間

アリスを受け渡さなかったら殺す。ルドルフの言葉はアリスに大きな動揺を広げた。

「そ、そんな条件受け入れられる訳無いでしょう？」

動揺するアリスをルドルフは面白がるかのように、見つめた。銀色の目は真っ直ぐにアリスを捕らえており、アリスは息を呑んだ。

全く表情を変えず何も言わない佐久間。アリスは不安な気持ちを遮るように佐久間を見上げた。

「トイー、どれぐらいかかる」

「3分、いや2分だ」

顔は前に向けたまま、佐久間はトイー言葉に耳を傾ける。トイーはにやりと笑うとその姿を煌びやかな宝石の中へと隠した。アリスは不可解な会話の内容に首を傾げる。

「なあロリコンさんよ。コイツの何処が良いんだ？」

佐久間は、アリスを鼻で指すと、ルドルフに向かって意味深な笑みを浮かべた。

「それは貴方が一番分かっているのではないですか？」

「さあなあ」

佐久間は嘲笑うかのような笑みを顔に貼り付け、眉間に皺を深く刻んだ。アリスには佐久間が今何を考えているのか全く理解することが出来ない。

佐久間を一瞥し、ルドルフはアリスを見下ろして言った。

「アリス、さあこちらへ」

ルドルフの銀色の目がゆっくりと捉える。

「本当に私があんたの物になったら皆を見逃してくれるのね」

「ええ、もちろん」

皆が助かるなら私はどうなっても構わない。アリスがそう思い、言葉を言いかけた時、佐久間はアリスの肩を強く握った。痛いくらいのが加わり、アリスは思わず言葉を失う。

アリスを見下ろすルドルフの瞳には、淀んだ欲望が渦巻いているのが、十分に見受けられる。しかし、ここでアリスがルドルフの要求を断つたら、確実に佐久間達は殺されるだろう。アリスは唇を噛みしめ、ぎゅっと目を閉じた。

「分かったわ、ルドルフ、あなたに付いていく」

冷静に言い放ったアリスは佐久間の腕をすりりと交し、ルドルフの前へ進んだ。佐久間は何も言わず、アリスに鋭い視線を注ぐ。アリスは一瞬、何かを言いかけたが、すぐにそれを濁すように笑った。

「良かったわね、佐久間。子供のお守りしなくて済んで」

「言いたい事はそれだけか」

佐久間はアリスをぎろりと睨むと、ペルマルに火を点す。

「煙草もうちよつと控えたらどう」

「他に言いたい事は」

「女性には優しくしなさいよ」

「他には」

「私みたいな色気たっぷりな女に悪態を付くのは佐久間だけだもの。もう佐久間にクソガキだのサルだの言われなくて済むと思うと、本当に清々するわ」

「清々したって顔かよ」

佐久間は今にも涙が零れそうなアリスの顔を、可笑しそうに見つめると紫煙を吐き出した。

アリスは反論しようと口を開いたが、どうにも流れる涙が邪魔で言葉さえ出ない。

ルドルフの悪意に満ちたそれとは違う、佐久間の青みがあった漆

黒の瞳。その目には強い意志が感じられ、そして色気さえも醸し出している。アリスは自分の心を全て見透かされているような気持ちになり、佐久間から目を離した。

「こづいっ時くらい甘えたらどうだ」

佐久間は短く揃った顎鬚を一撫ですると、帽子を深く引き寄せた。その行為が何だか照れ隠しのように思えて、アリスは不謹慎にも可愛らしいと思ってしまうた。

少しの諦めと、少しの安堵。アリスはゆっくりと深呼吸をし、最高の笑顔をみせた。

「天国に連れてってよ、佐久間」

第29話：そりゃあ光栄だ

「上等だ」

佐久間は口元を歪ませ、小さく笑った。

「佐久間ちゃん、準備OKよ」

トイの気の抜けた声が辺りに響くと。何か弾けた様な、高い音が続いてアリスの耳に入った。

その音と共に、佐久間の姿が一瞬で見えなくなる。アリスがそれを辺り一面に広がる白い煙のせいだと気付いたときには、視界が急激に悪くなり、1メートル先でさえ状況が掴めなかった。

「何この煙……」

状況が掴めないアリスはその場に立ちつくす。しかし、何にせよ、好都合だ。この煙にまぎれて佐久間達と逃げてしまえばいい。アリスはそう思い、手探りで歩き始めようとした。

「さあ来い」

アリスが一步踏み出した時、何者かに腕を引かれた。どうか佐久間達でありますように。アリスは懇願するようにゆっくりとその姿を確認した。

D I V A

「何であんたなのよ！ 離して！ ……佐久間達に何かしたら許さないんだから」

アリスがその目で見たのは、銀色の長い髪を靡かせこちらを冷めた目で見ているルドルフだった。ルドルフはにやりと笑うと、回りにいる部下たちに命令をした。

「金庫を隈無く探すんだ。あいつらを殺せ」

「ちょっと、約束が違うじゃない！」

騒ぐアリスにルドルフはため息を付くと、何も言わずにただアリスの腕を引く力を強めた。アリスはそのルドルフの姿にデジャヴのようなものを感じた。だが、その感覚も泡のようにすぐに消え去ってしまう。

ルドルフは付いてくる部下を制し、二人だけ付いてくるように言うのと、残りの部下たちは金庫へと向かわせた。

アリスは前を走るルドルフを息を切らしながら睨み付ける。ルドルフはちらりとこちらを見ると何事も無かったかのようにまた走り出す。今頃、佐久間達はどうしているのか、アリスは無事である事だけを考え走り続けた。いや、無事なのは分かっていた。佐久間もネスティ達も、腕は一流だ。足手まといなのはアリスの方だったのだから。

もう二度と会えないのかもしれない。アリスの胸にそんな不安がよぎる。

それから辿り着いた先は屋上だった。そこには、これから乗り込むのであるうへリコプターが2台。アリスはいよいよ逃げられなくな

った今の現状に深くため息をついた。

空には満天の星が輝いている。いつもなら綺麗に見える星たちも、今日は知らんぷりを決めこみ、ただ冷ややかにこちらを見つめていた。

「乗れ」

ルドルフは冷淡にアリスを見つめる。アリスは一瞬躊躇ったが、開き直ったかのように唸りを上げるヘリコプターに乗り込んだ。アリスに続いてルドルフ、そしてその部下の二人が乗り込む。回転翼がバラバラと音をたてながら、機体を少しずつ浮かせていた。

「そんなにあの男が大事か」

アリスはふいにかげられた言葉に思わずルドルフを見上げた。ルドルフは紫煙を浮かばせながら、アリスを真っ直ぐに見つめている。懐かしい甘い煙草の香りがアリスの心を刺激する。ルドルフが吸っていたタバコは、佐久間愛用のペルマルだった。アリスは頭に佐久間の顔を思い浮かべた。

「大事よ！」

「そんなに好きか」

「好きよ！ 悪い！？」

ルドルフは少し驚いたような顔をして、アリスを見つめた。

「佐久間じゃなきゃ嫌なのよ……、佐久間じゃなきゃ……」

アリスは、呪文を唱えるように呟くと、まるで駄々を捏ねる子供のように、叫び声をあげ泣いた。ルドルフの部下が不審な目でアリスを見ようと、アリスには関係無かった。

「そりゃあ光栄だ」

ルドルフはそう言うと、口元を押さえ意味深な笑みを浮かべた。アリスがルドルフの言った言葉の意味を理解できずにいると、ルドルフはアリスを強引に引き寄せる。

その時確かに、二人の唇は触れあった。

第30話：あなたって本当に嫌な男！

「んっ……」

ルドルフの顔がすぐ目の前にある。唇にあたる柔らかい感触。甘い煙草の香り。アリスはこの状況が何を示すか、理解できずにいた。そして、いよいよアリスの口内にルドルフの舌が入り込んで来た時、アリスはやつとのこと抵抗をした。

「…っ何すんのよ！」

「言つたら、その顔はそそるって」

ルドルフは悪びれる様子もなくそう言うと、妖艶な笑みを顔に張り付けた。息も絶え絶えなアリスに比べ、ルドルフは余裕な態度で煙草に火をつけている。

「な、何を言つて……」

アリスの困った様子が可笑しかったのか、ルドルフはククツと喉を鳴らした。アリスはまたデジャヴを感じた。今度は確かにアリスにある男の感覚を思い起こさせる。

「まさか……」

アリスが話そうとしたとき、ヘリコプターを操縦していた男たちが言った。

「佐久間、アリスにそんな事をして許されるとでもお思いですか？」

「そうそう。抜け駆けは良くないんじゃないの？ 佐久間ちゃん」

ルドルフの部下であるはずの男たちは、顔からめりめりと皮膚を剥がしとると、ルドルフを睨み付けた。

「ネステイ、トーイ！」

「アリス、そこにいる変態をぶん殴ってやれ」

「ちょっと待って……何で二人がいるの？ それに佐久間は……」

「『佐久間じゃなきや嫌』……ねえ」

ルドルフはアリスの言葉を遮るように言うと、相変わらず意味深な笑みを浮かべていた。アリスは戸惑いを隠しきれず、ルドルフを怪訝な顔で見つめる。

「あなたは一体……」

人工皮膚を剥がすときの独特の音をたて、現れたのは、ルドルフの部下たちに追われているであろう佐久間だった。

「佐久間！」

「そんなに俺が好きだったとはなあ」

紫煙を吹かす佐久間。アリスの顔は見る見るうちに赤くなっていた。

「な、な……」

佐久間に言わなければいけないことは沢山あった筈なのに、複雑な感情が混ざり合いアリスは口を金魚のようにぱくぱくさせた。

「な、な、何なんよ！ それに今、キ、キ……」

「ごちそうさま」

飄々とした表情のまま佐久間はそう言う顔にかかった黒髪をかきあげた。アリスはそんな佐久間を一瞥すると、大きく足を蹴り上げた。狭い機体の中では逃げ場もなく、佐久間はアリスの足を抱えて顔を青ざめた。

「危ねえだろ！」

「知らないわよ、そんなこと！ いつからよ！ いつから本物と擦り変わったのよ。それに、ルドルフは今……！」

「アイツならフィンデル銀行でお寝んねさ」

アリスは肩を揺らしながら佐久間に責めよった。佐久間はアリスの今にも暴れだしそうな足をウンザリとした顔を浮かべながら掴んだ。

「煙幕で連中があたふたしてる間に型をつけたんだよ。ったく、おめえも気付けよ」

「分かる訳無いでしょ！……ホントに何なのよっ」

アリスはそう言うと、佐久間に向かって大きく腕を振りかざした。もちろんその攻撃は佐久間に当たる事もなくすっぽりと佐久間の手の中に収まってしまった。

「『俺じゃなきゃ嫌』なんだろ？ 文句あんのか？」

佐久間はアリスの絶え間なく続く攻撃をするりと交し続け、挑戦的な笑みを浮かべた。その妖艶すぎる独特のオーラにアリスは身じろぐ。

「あなたって本当に嫌な男！」

「最高の褒め言葉だな」

真っ赤な顔をして悪態をつくアリスを、佐久間は短く笑った。

最終話：」

「

バラバラと大きな音を立てへりの回転翼が回る。夜空の星たちは相変わらず輝いていて、先程の冷たさはもう感じなかった。これも佐久間達のいるお陰なのだろうか。

「結局、ブルーダイヤ盗めなかったわね、ごめん」

アリスは三人を見渡すと、小さく呟いた。もともと佐久間達と一緒に行動し始めたのも、ブルーダイヤを盗むと言う契約をしたからだ。BBとの決着を付けたアリスは兎も角として、佐久間達の本来の目的は果たされていないはずだ。

「俺を誰だと思ってやがる」

「佐久間ちゃんはしつこいからねえ」

「どづいづこと……？」

不審な顔つきのアリスを一瞥すると、佐久間は何も言わずに足元から黒いバッグを取り出した。

「何？ 暗くて良く見えな……」

アリスがバッグを覗き込むと、そこには美しく輝く幻のブルーダイヤが身を潜めていた。

「ちよつ！ これ！」

「狙った物は必ず奪う」

佐久間は驚くアリスを満足気に見つめると、何事も無かったかのように煙草に火をつけた。赤い火がブルーダイヤに映りこみ、紫がかった光を放つ。

「あはははは！」

アリスは大きく口を開いて、豪快に笑った。この男には一生勝てない。そう感じていたのかもしれない。

「アリス、これからどうするのですか？」

アリスはネスティの問いには答えずに、息を大きく吸い込んだ。そして、ゆっくりと歌い始める。曲はアヴェマリア。その声はどこまでも轟き、それはまるで星達に届く勢いだった。闇に生きる男たちは、アリスを見て短く笑うと、その声に耳を澄ませた。

曲がゆっくりとフェードアウトしていく。息を整え、アリスは佐久間を見据えた。

「専属の歌姫はいかが？ 今なら、可愛い歌姫が一生あなたの為に歌うという特典付よ？」

「お前、俺たちの仕事がどれだけ危険か身をもって知っただろ。安易に考えるな」

佐久間は冷静にアリスを見つめて言い放つ。

「それが何？ 私には関係ないもの」

「関係あるだろうが！」

「ないわよ！ 私は佐久間が好き。だから佐久間の傍に居たいの？ 悪い？」

「ああ！？……あちっ」

佐久間は口をあんぐりと開けて驚いた表情を浮かべ、案の定、煙草は彼の足へと転げ落ちていった。落ちた煙草を罰の悪そうに拾いあげる佐久間。そんな佐久間をみて、ネスティ達は可笑しそうに笑った。

「流石の佐久間もアリスには勝てないようですね」

「ていうか、アリスちゃん。佐久間じゃなくて俺の為に歌ってよ」

アリスはトイーをちらりと見つめると、舌を出して肩を竦めた。その様子を見て、ネスティ達はまた声をあげて笑った。

「分かった。それだけ言うなら、専属の歌姫として雇ってやる」

佐久間は真剣な顔でそう言うと、新しく煙草に火をつけた。

「ほんと！？ 嬉しい！ ありがとう佐久間！」

「もちろん真夜中も俺だけの為に歌ってくれるんだろ？」

「ば、ばか！」

少し照れた表情を浮かべるアリスを、佐久間は強引に引き寄せる。そして口元を耳にあてると、アリスにしか聞こえない小さな声で囁いた。

「

」

タコのように真っ赤になったアリスを不思議そうに見つめるネスティ達。佐久間は相変わらず余裕の表情で紫煙をふかしている。

「何て言ったの!? すげえ気になるんですけど!」

「アリス、大丈夫ですか?」

アリスは放心状態でその場に座りこんでいる。どうやら今の所、佐久間の方が一枚上手らしい。

佐久間はそんなアリスを満足気に見つめ、声をあげて笑った。

夜の冷たい空気を引き裂き、回転翼は回り続ける。行きつく先は誰も知らない。一人の歌姫を巡る物語はまだ始まったばかりなのだから。

最終話：」

「（後書き）

今まで呼んで下さった皆様、そして評価をして下さった方、本当にありがとうございます。書きたいことが纏まらず相変わらず稚拙な文章ですが、最後まで書けたことを嬉しく思っています。それは、また。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4138a/>

D I V A

2008年11月7日08時00分発行